

干隈遺跡

—飯倉G遺跡1～3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第334集

1993

福岡市教育委員会

干隈遺跡

—飯倉G遺跡1~3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第334集



1993

福岡市教育委員会



第1次調査 SK02土壤検出状況（東から）



第2次調査Ⅱ区土壤群（南から）



第3次調査SK02土壤墓出土状況

序

福岡市西郊の早良平野は、弥生時代以来先人たちの残した数多くの遺跡に彩られた地域であります。

福岡市では膨張する市域人口の増加の中で、より緑との触れあいができる地域の住環境を整備するために緑地公園の設置を行なってきました。

今回の十隈中央公園整備は、谷あいの濠溝溜池と低丘陵とが組みあわせた優良な公園として注目されますが、これに伴い工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財の記録保存が必要となり、昭和63年から平成2年までの3ヶ年間発掘調査を実施しました。

発掘調査では、弥生時代後期終末期石蓋上壙墓群、古墳時代後期住跡群、奈良時代火葬墓などが発見されました。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、市域埋蔵文化財についての認識とご理解、更には学術研究上の基本的資料としてご利用いただければ幸甚に存じます。

平成5年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1989年1月7日から1991年9月20日にかけて発掘調査を実施した平隈中央公園建設に伴う、第1～3次の調査報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居跡 SC、土壙 SK、溝 SD、炉跡 SG、道路状造構 SF、掘立柱建物 SB、欄列 SA とし、番号は略号のあとに付けた。
3. 調査は、第1次調査（横山邦繼）、第2次調査（宮井善朗・長家伸）、第3次調査（吉留秀敏）でそれぞれ行なった。
4. 本書掲載の遺構実測図および遺物実測図は調査者の他、大橋隆司（佐賀県牛津町教育委員会）がおこなった。また、第1次調査 SK02土壙出土の鏡に付着した赤色顔料の同定については本田光子氏（埋蔵文化財センター）の手を煩わした。
5. 本書掲載の遺構・遺物写真は、各調査担当者によった。
6. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
7. 本報告書にかかわる遺物・記録類（実測図面、写真、スライド、日誌類）は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、管理されるので活用されたい。
8. 本書の執筆・編集は、横山、長家、吉留が協同して行なった。

本文目次

	本文頁
第1章 はじめに.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第3章 第1次調査の記録.....	5
1. 調査の組織.....	5
2. 調査概要.....	5
3. 調査の記録.....	6
4. 小結.....	34
第4章 第2次調査の記録.....	35
1. 調査の組織.....	35
2. 調査概要.....	35
3. 調査の記録.....	37
4. 小結.....	42
第5章 第3次調査の記録.....	43
1. 調査の組織.....	43
2. 調査概要.....	44
3. 調査の記録.....	45
4. 検出遺構と遺物.....	46
5. その他の出土遺物.....	50
6. 小結.....	51
第6章 おわりに.....	53

図版目次

PL. 1	1 第1次調査Ⅱ区調査前全景（東から）
	2 第1次調査Ⅰ・Ⅱ区調査前全景（南東から）
PL. 2	1 第Ⅱ調査区全景（東から）
	2 SD01・02溝出土状況（西から）
PL. 3	1 SC01住居跡検出状況（南西から）
	2 SC01住居跡床面須恵器壊出土状態
	3 SC01住居跡床面土師器壊出土状態
PL. 4	1 SA01櫛及びSB01掘立柱建物検出状況（東から）
	2 SD01・02溝検出状況（北から）
PL. 5	1 SK03土壤検出状況（西から）

- 2 SD01溝土層断面（南から）
PL. 6 1 SK02土壤検出状況全景（東から）
2 SK02土壤副葬鏡出土状態（北から）
3 SK02土壤掘方断面検出状況（東から）
PL. 7 1 SK04土壤検出状況（掘下げ前、東から）
2 SK04土壤検出状況（掘下げ後、西から）
3 SK05土壤検出状況（東から）
PL. 8 1 SK11土壤検出状況（西から）
2 第Ⅰ区全景（南から）
PL. 9 1 第Ⅲ区調査前全景（北から）
2 第Ⅲ区南半部調査風景（南から）
PL. 10 第Ⅲ区全景（北から）
PL. 11 1 SK10土壤検出状況（北から）
2 SC03住居跡検出状況（南から）
3 SK16土壤検出状況（西から）
PL. 12 1 SK17・18土壤検出状況（西から）
2 SK17土壤副葬土器出土状態（北から）
PL. 13 1 SG01製鉄炉検出状況（東から）
2 SG01製鉄炉検出状況（西から）
3 SG01製鉄炉内鉄滓除去状態（西から）
4 SG01製鉄炉完掘状況（西から）
PL. 14 1 SK15土壤検出状況（西から）
2 第Ⅲ区調査区遠景（熊添池東南から）
PL. 15 SC01住居跡出土遺物
PL. 16 SC01住居跡・SK06土壤・SD01・02溝・SP36・37・39柱穴出土遺物
PL. 17 SD04溝および第Ⅱ区造構検出面出土遺物
PL. 18 第Ⅱ区造構検出面、第Ⅲ区柱穴および造構検出面、SC03住居跡出土遺物
PL. 19 SC03住居跡・SK03・12・13土壤出土遺物
PL. 20 SK03・04土壤出土遺物
PL. 21 SK17土壤・SG01製鉄炉・SF01道路状造構出土遺物
PL. 22 第Ⅲ区造構検出面、遺物包含層出土遺物
PL. 23 第Ⅲ区遺物包含層出土遺物(1)
PL. 24 第Ⅲ区遺物包含層出土遺物(2)
PL. 25 SC01住居跡・SK02・03土壤・SD01溝及び第Ⅱ・Ⅲ区造構検出面出土遺物
PL. 26 1 第2次調査Ⅰ区西側全景（東から）
2 第2次調査Ⅱ区北側全景（北から）
PL. 27 1 SC03住居跡検出状況（北から）
2 SC14住居跡検出状況（西から）
PL. 28 1 SK12土壤検出状況（南から）
2 SK22土壤検出状況（南から）

- 3 SK23土壤検出状況（南）
PL. 29 1 SK24土壤検出状況（南）
2 SK25土壤検出状況（東）
3 SK26土壤検出状況（北）
PL. 30 1 3次調査地点遠景（東から）
2 3次調査地点遠景（南から）
PL. 31 1 3次調査地点近景（北から）
2 完掘状況（北から）
PL. 32 テラスⅠ遺構検出状況（北から）
PL. 33 1 B～D区完掘状況（北から）
2 B区完掘状況（西から）
PL. 34 1 E区完掘状況（南から）
2 藏骨器出土状況（北から）
3 SK04土壤検出状況（南から）
PL. 35 1 SK02土壤墓検出状況（東から）
2 SK02上墳副葬遺物出土状況（北から）
3 SK06上墳墓検出状況（北から）
4 SK01土壤検出状況（西から）

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図(1/50,000)	2
Fig. 2	第1次調査全体図(1/200)(折込)	
Fig. 3	SC01住居跡出土状況実測図(1/80)	7
Fig. 4	SC01住居跡カマド出土状況実測図(1/20)	8
Fig. 5	SC02住居跡出土状況実測図(1/60)	9
Fig. 6	SC03住居跡出土状況実測図(1/60)	10
Fig. 7	SC03住居跡土層断面実測図(1/20)	10
Fig. 8	竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)	11
Fig. 9	SK01土壤出土状況実測図(1/30)	12
Fig. 10	SK02上墳出土状況実測図(1/30)	14
Fig. 11	SK02土壤出土遺物実測図(2/3)	15
Fig. 12	SK03土壤出土状況実測図(1/30)	16
Fig. 13	SK04土壤出土状況実測図(1/30)	17
Fig. 14	SK05上墳出土状況実測図(1/30)	18
Fig. 15	SK06土壤出土状況実測図(1/30)	18
Fig. 16	SK10土壤出土状況実測図(1/30)	19
Fig. 17	SK11土壤出土状況実測図(1/30)	19
Fig. 18	SK12土壤出土状況実測図(1/30)	20

Fig. 19	SK14上塙出土状況実測図 (1/30)	20
Fig. 20	SK15土壤出土状況実測図 (1/30)	21
Fig. 21	SK16土壤出土状況実測図 (1/30)	21
Fig. 22	SK17・18土壤出土状況実測図 (1/30)	22
Fig. 23	土壤出土遺物実測図(1)(1/3)	23
Fig. 24	土壤出土遺物実測図(2)(1/3)	24
Fig. 25	SD01溝土層断面図 (1/20)	25
Fig. 26	SD02溝土層断面図 (1/40)	26
Fig. 27	溝出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig. 28	SG01炉跡出土状況実測図 (1/30)	27
Fig. 29	SG01炉跡出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig. 30	SP01道路状遺構東西十層断面図 (1/20)	29
Fig. 31	SP01道路状遺構出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig. 32	SB01・02・03掘立柱建物跡出土状況実測図 (1/100)	31
Fig. 33	第1次調査表土・表面採集遺物実測図 (1/3)	33
Fig. 34	第2次調査Ⅰ区遺構配置図 (1/200)	36
Fig. 35	第2次調査Ⅱ区遺構配置図 (1/200) (折込み)	
Fig. 36	SC03住居跡出土状況実測図 (1/40)	37
Fig. 37	SC03出土遺物実測図 (1/3)	39
Fig. 38	SC14住居跡及び出土遺物実測図 (1/40-1/3)	40
Fig. 39	SK12土壤及び出土遺物実測図 (1/30-1/3)	41
Fig. 40	SK22・23・24・25・26土壤出土状況実測図 (1/40)	42
Fig. 41	第3次調査周辺地形図 (1/500)	44
Fig. 42	第3次調査グリッド配置図 (1/200)	45
Fig. 43	第3次調査遺構全体図 (1/100) (折込み)	
Fig. 44	第3次調査土層断面図 (1/80)	47
Fig. 45	SK03土壤出土状況実測図 (1/10)	48
Fig. 46	SK03土壤出土遺物実測図 (1/3)	48
Fig. 47	SK01・02土壤出土状況実測図 (1/20)	49
Fig. 48	SK02土壤出土遺物実測図 (1/3)	50
Fig. 49	SK04土壤出土状況実測図 (1/20)	51
Fig. 50	表土・表面採集遺物実測図 (1/3-1/4)	52

付 図 目 次

遺跡調査区全体図 (1/400)

第1章 はじめに

当該地は、早良平野の東辺を縁どる標高20m前後の低丘陵部にあり、昭和61年4月に学校法人西南学院より文化財の有無についての確認依頼があった。(受付番号61-2-25)

依頼を受けた埋蔵文化財課では同年4月17~19日の3日間重機による試掘調査を行なった。

試掘調査では計8本のトレンチ調査を行ない遺構確認にあたったが、対象地は現況で大きく3地点に区別された。これは第I区—北西部既存宅地部分(1トレンチ)、第II区—中央部丘陵背部(2・4・7・8トレンチ)および第III区—丘陵東側斜面(3・5トレンチ)である。

試掘調査の結果、第I区では削平のため遺構は検出できず、他は第III区を中心として弥生時代後期~古墳時代後期の包含層、焼土塊およびピット群が表土直下(GL-20cm程度)で見つかり、開発にあたっては事前の発掘調査が必要であると考えられた。

この後当該地は、市都市整備局公園緑地部公園建設課による「干隈中央公園」用地として進展し、建設と共に伴う発掘調査内容について協議が重ねられた。

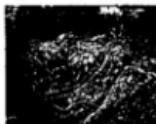
協議では、当該地内の自然林を基本的に保存活用する整備方法が基本的にとられ、遊歩道、ベンチ、遊具設置などに伴う土木工事部分に限定した調査区の設定が確認された。

調査は、昭和63年度末(平成元年1月)を第1次調査として、同2次(平成2年7月)、同3次(平成3年)に亘った。

なお、第1次調査では途中の平成元年2月25日に現地説明会を開催した。

当日は、雨天で、足もとが滑りやすく、傘をさしての見学会となつたが、早良・城南区を主に59名の参加者があり、邪馬台国時代の早良平野に想いをはせた一日であった。

干隈遺跡



現地説明会

1989.2.25

奈良県立大学考古学研究会

飯倉G遺跡調査一覧

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地所在	開発用途	調査期間	調査担当者
1	8845	IKR-G-1	城南区干隈二丁目482番2	干隈中央公園建設	19890107~19890331	横山邦輔
2	9018	IKR-G-2	城南区干隈二丁目地内	干隈中央公園建設	19900703~19900831	宮井善則、長家伸
3	9119	IKR-G-3	城南区干隈二丁目地内	干隈中央公園建設	19910802~19910920	吉留秀敏



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- ▲印は千葉道跡(弥生C遺跡)
- 1. 寺入郡遺跡(弥生の初期半～中期)
- 2. 入密郡本遺跡(弥生中期)
- 3. 霧笛遺跡(弥生中期前半)
- 4. 四箇遺跡(弥生中期前半)
- 5. 清田遺跡(弥生中期～後期)
- 6. 萩原遺跡(弥生前期～後期)
- 7. 田村遺跡(弥生前期～中期)
- 8. 伊賀遺跡(弥生中期前半)
- 9. 次郎丸馬蹄石遺跡(弥生中期)
- 10. 免遺跡(弥生中期～後期)
- 11. 鹿島F遺跡(弥生後期)
- 12. 鹿島C遺跡(弥生中期)
- 13. 鹿食C遺跡(弥生後期半～中期)
- 14. 有田遺跡群(弥生中期後期)
- 15. 斎灘跡群(弥生中期～後期)
- 16. 斎瀬跡群(弥生中期)
- 17. 斎船溝跡群(弥生中期)
- 18. 長峰遺跡(弥生中期)
- 19. 清江遺跡(弥生中期)
- 20. 金武遺跡(弥生中期)
- 21. 稲池遺跡(弥生中期)
- 22. 吉武遺跡群(弥生の初期～後期)
- 23. 鶴ヶ西遺跡(弥生中期)
- 24. 砂原戸遺跡(弥生中期)
- 25. 西方寺遺跡(弥生後期)
- 26. 西方中腹遺跡(弥生後期)
- 27. 西方久保遺跡(弥生中期前半)
- 28. 押六町ツイジ遺跡(弥生中期)

第2章 遺跡の立地と環境

本遺跡は福岡市の西郊に位置する早良区平野の東側にある標高20m前後の飯倉丘陵上に立地する。

この遺跡の位置する早良平野は、長垂丘陵を挟んで西側にある糸島平野とはほぼ同規模の面積を有し、北側の今津湾にひらける平野で、旧石器時代後期遺跡を初源として数多くの遺跡が残されている。平野は西側を北流する室見川を主流に、十郎川・金剛川・樋井川などの小河川がみられ、遺跡の殆どはこれら河川の營力によってつくり出された扇状地・自然堤防上などに立地し、展開しているといえる。

以下ではこの早良平野に点在する主要な弥生時代遺跡を紹介し、本遺跡の初源をなす弥生時代後期終末前後の墓地理解の一助としたい。

本平野での弥生時代遺跡の分布変遷をみると前期では西部の十郎川下流域に拾六町ツイジ、石丸古川遺跡などがみられるものの主流は室見川東岸に分布する。中期段階では藤崎遺跡などの海岸砂丘上も含む全域に拡大する。更に後期段階では野方塚原遺跡のような環溝集落もみられるが概して遺跡規換は小規模分散的になるものと考えられる。

東入部遺跡 (Fig. 1-1) 早良平野の最奥部に位置する。1991年（平成3）の2次調査で前期後半～後期前半代の甕棺墓130基、土壙墓、木棺墓あわせて30基の計160基が検出された。墓地は副葬品を伴う甕棺墓を含み、また中期中頃以降では南・北側にそれぞれ方形状の区画をなしている。

このうち中期初頭甕棺墓（84号）では細形銅剣1口、また北側の区画された墓地では中期後半の4基の甕棺墓（104・106・113・114号）より素環頭刀子1口、鉄矛1口、鉄劍1口、鉄刀1口が出土した。なお、区画された墓地は北側のもので16×14m、溝幅8m、南側のものは10×11m、溝幅4mをはかり、深さは何れも1m程度であり、本来は墳丘墓であった可能性がある。

四箇遺跡 (Fig. 1-3) 室見川東岸の標高22～23mの微高地に営まれる。弥生中期前葉の甕棺墓8基、土壙2基、堅穴20基、石蓋土壙（？）1基が検出された。礫原に墓壙を掘った小規模の墓地である。（四箇J-10地点）

「西鉄用田遺跡調査報告書」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集」1981年

田村遺跡 (Fig. 1-7) 四箇遺跡の北側2kmの微高地に営まれる。1984年の市営山村住宅建設に伴う発掘調査で弥生前期後半代（伯文式）の甕棺墓10数基が検出されている。現在早良平野では最も古い時期の墓地と考えて良い。

飯倉C遺跡 (Fig. 1-13) 飯倉丘陵西端の標高33m前後をはかる舌状丘陵上に立地する。

(飯倉唐木遺跡)

前期末（金海式）壺棺墓より細形銅剣、管玉類などを出土した。青銅器の单一的副葬例としてはまとまつた墓地遺跡である。

「有田遺跡」、1968年

有田遺跡群 (Fig. 1-14) 弥生前期初頭の大形環溝集落を初源として、後期まで続く早良平野では拠点的集落である。洪積丘陵北端では大形振方の壺棺墓はあるが副葬遺物はみられず、南端で前期末壺棺墓より細形銅戈が出上している。

藤崎遺跡群 (Fig. 1-17) 博多湾岸に形成された標高4m程の砂丘上に立地し、東西400m、南北150mの規模となる。これまでの調査で弥生前～後期の壺棺墓200基以上、石棺墓・土塚墓・特殊墓などが出土した。副葬品は管玉1個のみであるが、東に連なる西新町遺跡ではゴホウラ貝製貝輪3個、銅剣切先などが知られている。

吉武遺跡群 (Fig. 1-22) 約40haの規模をもつ遺跡で、飯盛山々麓の扇状地に立地する。弥生前期末～中期初頭の特定集団墓地、中期後半には墳丘墓の形成がみられる。

野方塚原遺跡 (Fig. 1-25) 後期終末の径100mを測る環溝集落遺跡で、堅穴住居跡の他に、溝内より多量の当該期遺物を出土した。

野方久保遺跡 (Fig. 1-26) 十郎川右岸の標高14mの丘陵に立地し、前期末～後期初頭の壺棺墓67基が出土した。この内中期前葉の壺棺墓2基から細形銅剣1、細形銅劍十把頭飾の副葬がある。また中期中葉ではヒスイ勾玉、碧玉管玉、柳葉形鉄鎌が見つかった。

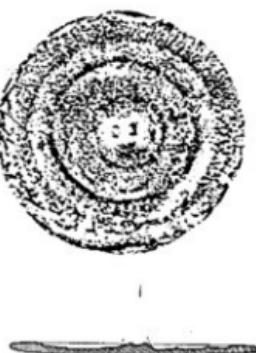
以上紙面の都合上、十分な紹介とならなかつたが、早良平野における弥生時代遺跡の分布は日々の調査で塗り変えられつつあり、今後の画期的な発見も十分予想されるものである。



弥永原（南区）



姫氏馬場（西区）



飯倉G（城南区）

第3章 第1次調査の記録

1. 調査の組織

下限中央公園建設に伴う飯倉G遺跡1～3次調査は、本市都市整備局公園緑地部公園建設課の令達事業として行なったものである。調査組織は以下の通りである。

調査委託：福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝、同第1係長 折尾学、第2係長 飛高憲雄

調査庶務：岸田隆、松延好文

調査担当：横山邦雄

調査補助：長家伸、川畑明治（九州大学学生）、大橋隆司（現佐賀県牛津町教育委員会）、高橋健治（現平尾中学校教諭）

整理作業：小森和子、土斐崎つや子、安野良、副田則子、吉村知子、伊藤美紀

発掘作業：廣瀬梓、浜地富男、神田宏太郎、岡根義夫、因ヨシ子、小柳和子、倉光アヤ子、倉光千鶴子、倉光京子、井上ムツ子、井上トミ子、消末シズエ、結城千代子、井上ヒデ子、井上清子、井上磨智子、尾園佳枝、柳浦八重子、横溝恵美子、横溝カヨ子、富崎栄子、富崎フミ子、山口タツエ、吉岡勝野、永井鈴子、佐藤みづほ、德水ますみ、臨坂レイコ、米島ハツネ、藤タケ、原幸子、藤崎久子、若狭睦代、藤やす江、鍋山絹江、樋口タカ子、佐藤豊美、山口忠和、佐藤巴宮、小林重光（順不同）

2. 調査概要

第1次調査は、調査対象区の南端および東側斜面に亘り、南側からI区、II区、III区と呼んでいる。

区別には面積の広狭はあるが、傾斜面の畠地利用のため全体的に遺構の完存するものは少なく、土壤群が主に検出された。

遺構別には、6世紀後半代を主とする竪穴住居跡3軒、掘立柱建物3棟、柵列1条、墳墓および生活遺構としての土壙20基、溝3条、製鉄炉と考えられる炉跡1基、道路状遺構1条、柱穴群などであり、主にII・III区で検出した。また時期的には弥生時代後期～中世に及ぶものと考えられる。

またこれに伴う遺物類はそれほど多くないが、土壙中でII区のSK02土壙とした墳墓からは、棺内で鉄製刀子、棺外で小型彷製鏡の副葬がみられた。調査時の聞きとり調査によれば、昭和

初期には粘土採掘のため石蓋土壙墓と考えられる同様の壙墓が丘陵最高部付近を主に多く出土したとされた。さらに、調査区内の丘陵裾部にみられる遺物包含層では6世紀後半から7世紀初頭にかけての須恵器・土師器が特徴的に出土し、同時期の集落が広範囲に形成されていたものと考えられる。

3. 調査の記録

1). 穫穴住居跡 (Fig. 3~8, PL. 1~3)

畫穴住居跡と考えられるものは、前述のように傾斜地に営まれている為、平面形を完全に残すものは少なく、3軒が確認できた。また他に土壙と考えたものの中に含まれている可能性が高い。

SC01住居跡 (Fig. 3・4・8, PL. 3)

SC01住居跡は、Ⅱ区北側の緩斜面に営まれ、北壁・西壁を残し、南壁は明らかではない。また東壁は壁に沿ったと考えられる造り付けのカマドが残り、位置を知ることができる。北壁床面付近には本住居跡に統くSK03土壙が営まれている。

平面形・規模

南壁は傾斜地のため失なわれているが、西・北壁下には幅20cm程の浅い壁溝が認められ、この延長規模より考えれば西壁長6m、北壁長5m程のやや南北に長い長方形を呈するを考えられる。また壁高は40~50cmを残す。

主柱穴

床面中央に4本みとめられる。柱掘方は何れも直径30cm程度の不整円形で、柱痕は径15~20cmをはかる。また主柱穴の柱配置は東西に長く、東西2.0m、南北1.4~1.5mの柱間となっている。

カマド (Fig. 4)

東壁中央部付近に造りつけられたカマドである。西側に焚口があるものと考えられるが残存していない。60×50cm程度の焼上塊がみとめられ、中央底面に火に遭った甌と考えられる上師器片が出土した。

出土遺物 (Fig. 8)

住居跡埋土上層および床面、カマド内より須恵器・土師器が出土している。

畫穴住居跡一覧

番号	地区	形状	法量 (m)			長軸方位	遺構時期	備考
			縦長	横長	深さ			
SC01	Ⅱ	方形	5	4.7	0.4	—	古墳後期	東壁にカマドあり
SC02	Ⅲ	方形	5.2	2.3	0.35	—	今	東壁不明
SC03	Ⅲ	方形	3.7	2.1	0.4	—	今	西と北壁を残す

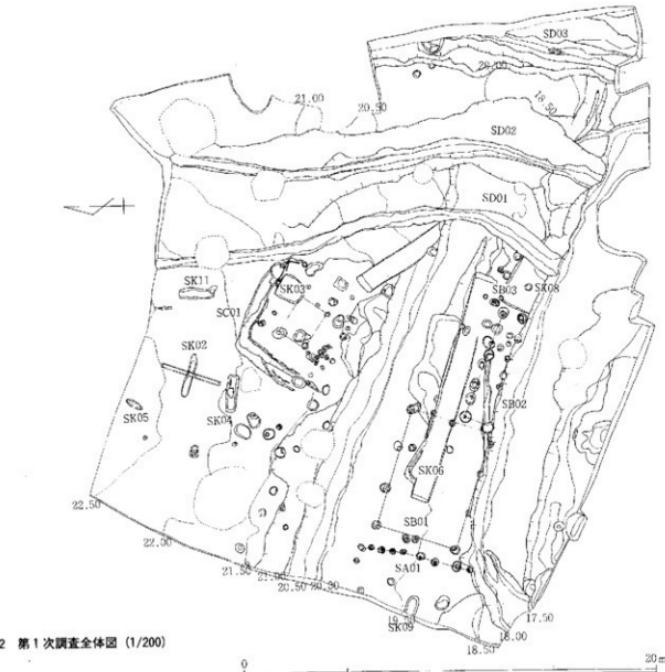
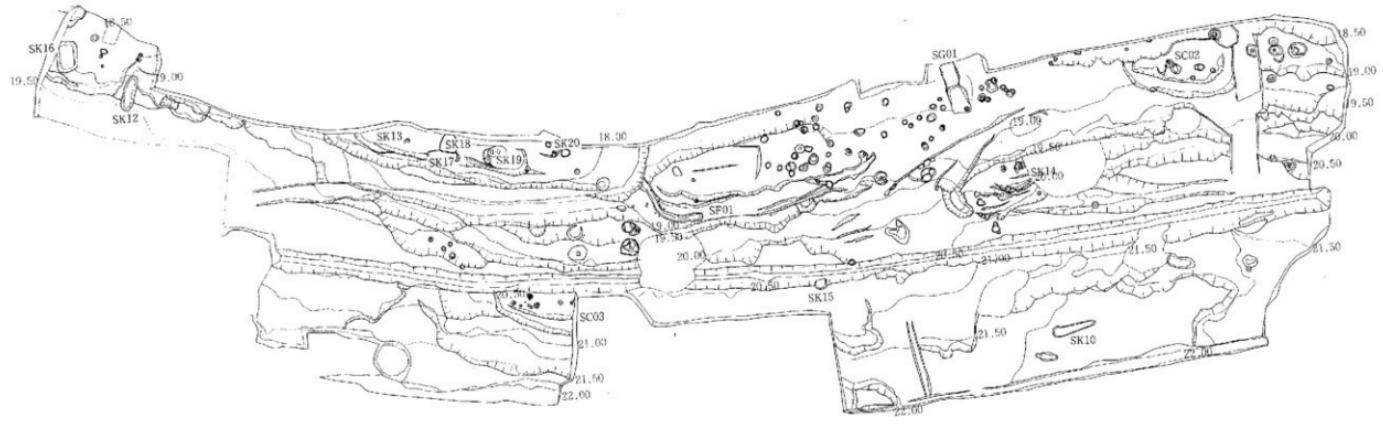


Fig. 2 第1次調査全体図 (1/200)

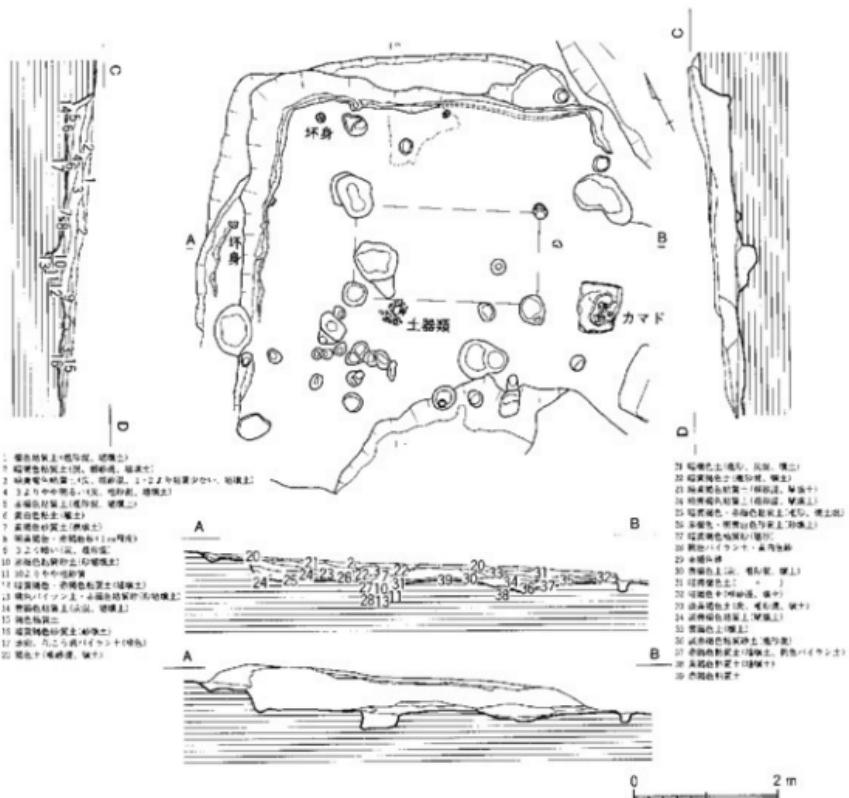


Fig. 3 SC01住居跡出土状況実測図 (1/80)



Fig. 4 SC01住居跡カマド出土状況実測図 (1/20)

成堅縫である。天井部にヘラ記号がある。

坏身 00003は立あがりが低く、内傾化の著しい身である。底部に回転ヘラ削りを残し、他はナデ調整である。口径10cm、器高3.5cmを測る。器色灰青白色を呈し、胎土密、焼成堅縫である。00012も薄づくりの身で、立あがりは低い。外底部には回転ヘラ削りを残す。口径10.8cm、器高3.5cm以上を測る。器色暗灰色を呈し、胎土密、焼成堅縫である。00002は立あがり端部を欠失する。底部のヘラ削りは狭い。口径11cm、器高3.6cmを測る。器色は明灰白色を呈し、胎土やや粗、焼成堅縫である。00010は更に受部立あがりが低く、鈍い身である。口径11.8cm、器高3.1cmを残す。器色は灰一灰黒色を呈し、胎土密、焼成良好である。00005は体部が厚づくりで、受部立あがりは低い。口径12.8cm、器高3.1cmを測る。器色は暗青灰色を呈し、胎土密、焼成堅縫である。

高台坏 何れも埋土上層の出土であり、直接伴するとは考えられない。00008は底部罐よりやや入った位置に低い高台をもつ坏である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。口径17cm、器高5.3cmを測る。器色は暗灰色を呈し、胎土密、焼成堅縫である。00009はやや小口径の坏である。体部内外面に回転ナデを施し、内底部にナデを残す。口径17.8cm、器高5.5cmを測る。器色は灰白色を呈し、胎土密、焼成良好である。

須恵器坏蓋 00011は口縁内面反りの消失した蓋で、ヘラ削りも天井部の1/3程度となっている。器色は白灰色を呈し、復元口径11.4cm、器高4.4cmをはかる。00007は天井部を失う蓋であり、一部にヘラ記号を残す。口径12cm、器高3.2cmを測る。器色は灰白色を呈し、胎土良好、焼成堅縫である。00006も器高の低い蓋で、天井部の一部にヘラ削りを残し、他は回転ナデ調整。口径12.6cm、器高3.2cmを測る。器色暗赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅縫である。

土器器 0013は、瓶と考えられる。直口する口縁は直線的にすばまって底部へ至ると考えられる。器面の荒れによって、口縁内面に荒い様ハケ目が残る以外は不詳である。口径24cm、残存器高12.4cmを測る。器色は淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成やや軟質である。

SC02住居跡 (Fig. 5)

SC01住居跡の北東側50mのⅢ区斜面下で検出された。住居跡は、西壁および北壁の一部を残すのみであり、東壁は近代の擾乱により失なわれている。

平面形は方形をなすものと考えられ、西壁長5.2mを測る。壁下は低い段を有し、この内側にも壁と平行する段が巡る。

主柱穴は2本が確認できる。何れも掘方径30cm程度のものである。

なお、埋土内からはSC01住居跡出土遺物と同時期のⅣ期須恵器蓋坏が出土しており、時期的には7世紀を前後するものと考えられよう。

SC03住居跡 (Fig. 6~8)

Ⅲ区の北端近くで検出された。SC02住居跡からは北西35mの位置にあり、比高差は約2m程ある。

本住居跡も斜面に造営されたため、殆どの壁面を失なっており、かろうじて西壁の一部・コーナーを残している。壁高は南壁側の土層断面でみると70cm程度はあったものと推定できる。また住居跡の埋没は除々になったと考えられ、埋土中層に土器破片が多く混入している。

床面にはほぼ6個体の土器壺が密着して出土した。本来並べおかれたものと考えられるが、口縁部を欠失するものが多い。

出土遺物 (Fig. 8)

須恵器蓋坏身 00052は、底部および体部の区別が明らかな坏身である。底部外面は回転ヘラ削り、内外面は回転ナデを施す。受部の立あがりは低いが、しっかりしたつくりである。器

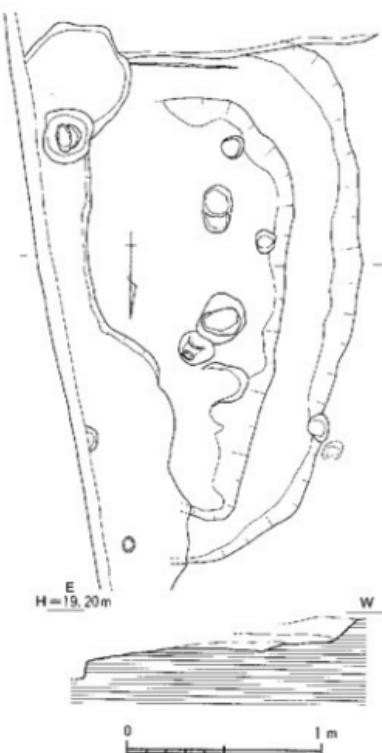


Fig. 5 SC02住居跡出土状況実測図 (1/60)

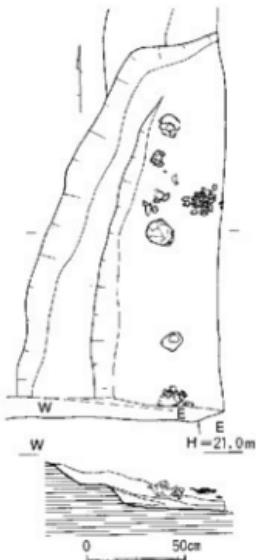


Fig. 6 SC03住居跡出土
状況実測図 (1/60)

色は内外面ともに灰白色を呈し、胎土は密、焼成も良好である。口径10.2cm、残器高2.8cmを測る。

須恵器壺 0053は直口壺の蓋か。口縁部は直立し、天井部との境に2本の沈線を施している。天井部は僅かしか残さないが、丸くおさまり、つまみがつく形態であろう。器色は暗青灰色を呈し、胎土は非常に密、焼成堅緻である。口径は5.8cm、器高3.1cmを残す。

土師器壺 00050は、胴部の大半を欠失する。口縁は頸部より屈曲して外方に開く。調整は、口縁外面が横ナデで、胴部は荒い縱ハケ目調整を施す。また内面口縁には横ハケ目を残し、胴以下は底部方向からのヘラ削りを施している。器色は淡橙色を呈し、胎土密、焼成良好である。口径22cm、残存高8.4cmを測る。00047は底部の一部を欠失する壺である。しまった頸部と胴部最大径位置の低い特徴をもつ。外面上半は磨滅が著しいが、下半部には細かい縱ハケ目調整が残る。胴部内面は頸部付近が横方向のヘラ削り、以下が底部方向からのヘラ削りが残る。また内底部は不定方向のヘラ削りを施す。器色は暗黄褐色を呈し、胎土に粗砂混、焼成やや軟質である。

口径20.4cm、器高30cmを測る。00048は上半部を欠失する。ややあげ底の大きな底部をもつ壺である。胴部外面は粗い縱ハケ目、外底部も粗いハケ目調整が残る。また胴部内面は底部方向からのヘラ削りで、内底部はユビナデが残る。器

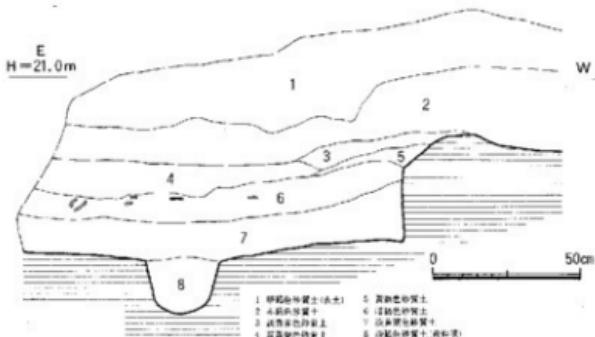


Fig. 7 SC03住居跡土層断面実測図 (1/20)

色は暗黄褐色を呈し、胎土はやや粗、焼成堅緻である。底部径14.8cm、残存高20cmを測る。

2) 土壌 (Fig. 9~24)

土壌は、I~III区をあわせて20基ほどが確認できた。形態的には長方形のものが多数を占め

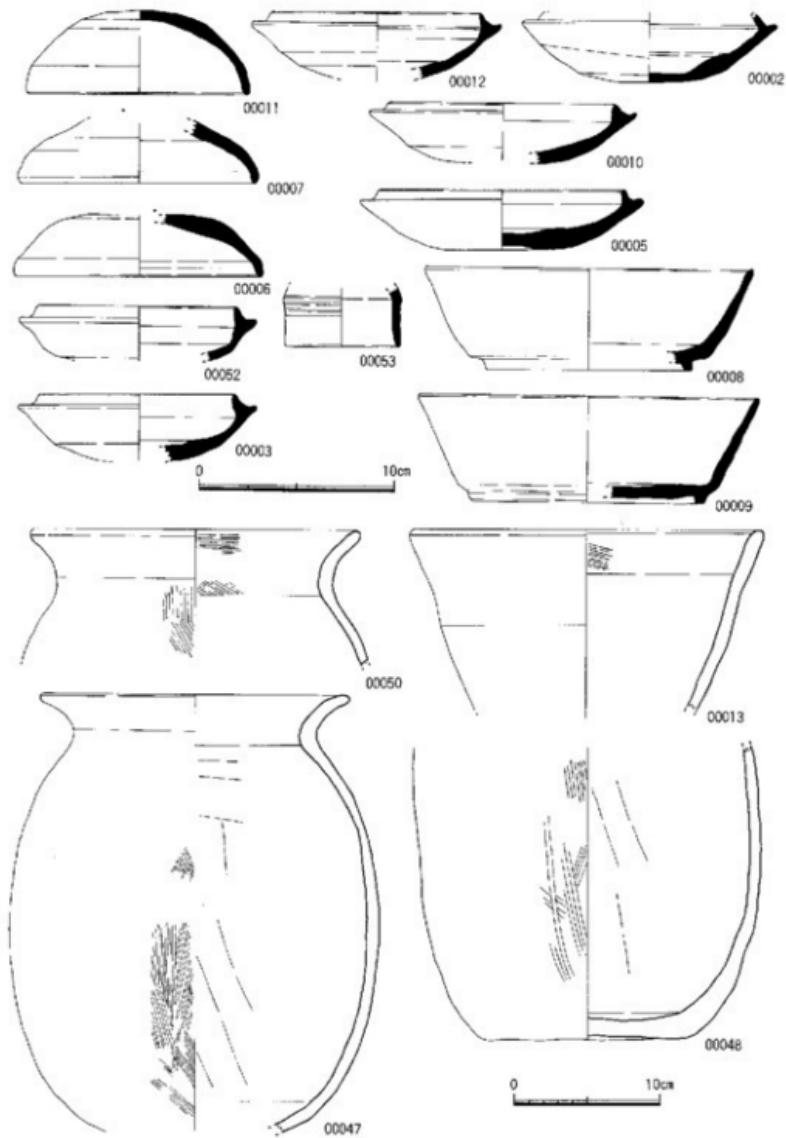


Fig. 8 積穴住居跡出土遺物実測図 (1/3-1/4)

る。性格的には墳墓、生活造構などと考えられよう。以下個別造構について説明を加えることとする。

SK01土壙 (Fig. 9)

SK01土壙は、I区南端に位置し、西側を近代の削平によって影響を受けているため、全体を残さない。現存規模は直径70cm、深さ30cmを残し、円形となるものと考えられ、生活造構の一部であろう。造構埋土は暗褐色粘質土であるが、時期の判る遺物は出土しなかつた。

SK02土壙 (Fig. 10・11)

調査区II区の北端部の緩斜面で検出された土壙である。土壙は傾斜方向と直交方向に営まれており、木痕や山芋掘りの際の堅穴と思われる擾乱によっても破壊を受けている。また上部もかなりの削平を受けていると考えられよう。

土壙は二段の掘方をもち、二段目掘方内には赤色顔料を、更にこの南側壁上には小型彷製鏡が出土している点で墳墓と考えられる。

掘方 外側の一段目掘方は擾乱により部分を失っているが、ほぼ東西長辺長が1.9~2.0m、南北短辺長1.3~1.4mの長方形を呈する。また深さは削平のため0.15cm程度しか残さない。掘方は黄褐色粘質土(地山)に掘込まれており、埋土は同色同質粘質土がやや暗い色調を帯びるものであった。

中央土壙(主体部) 掘方長辺と平行に掘られた隅丸長方形の土壙である。長辺軸はN-72°-Eにとり、ほぼ東西方向に向いている。

土壙は掘方西側短辺に接する小口部分では壁面を削って掘方がなされているが、ほぼ東西長辺長1.8m、南北0.45~0.5mを測る規模となる。

内部は壁面の立ちあがりは緩く、掘方を行なった後に床面および両側壁に赤褐色粘質土を貼付している。

掘方後に粘土貼付した床面上には西側小口付近を中心にして青緑色の変成岩扁平礫を5個程水平に敷いている。また西側小口付近に赤色顔料が集中して発見され、頭部位置と考えられる。さらに内部西半部および一段目掘方内にも青白色粘土のブロックがみとめられ、棺蓋材の安定或は目貼りのものと考えられた。

土壙からは副葬遺物と考えられる鉄刀子1口、小型彷製鏡1面が出土した。

鉄刀子は、南側側壁に平行に切先を東に向けておかれていた。また鏡は土壙南壁上に接して鏡面を上に出土した。棺外の副葬と考えられる。

出土遺物 (Fig. 11)

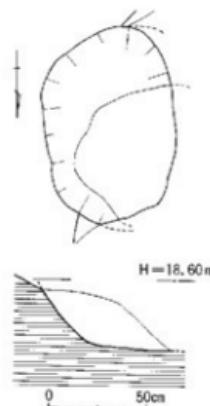


Fig. 9 SK01土壙出土
状況実測図 (1/30)

小形彷製鏡 20001は面径8.3~8.4cmを測る小形鏡である。鏡面は淡青緑色を呈し、凸面をなし、滑面となって銅質は良いと思われる。鏡背は、幅1cm程の平縁となり、内側に沿って幅2mm~1mmの粗い斜行櫛歯文を2mm程度の間隔でめぐらす。また内区の文様は鋳あがりの粗雑さと手指れによるものか、内行花文はみとめられないが、中央部鉢のまわりに径2.5cm程の圓線を一条めぐらす。重量60g。

鉢の幅は1.15cmで、孔径2.5mmをはかる。高さは欠損のため不詳であり、鉢孔の径は4mm程度である。

また本鏡には鉢外側の内区圓線上に铸造後の穿孔がみられる。孔径は3.5mm程度であり、金属による穿孔と考えられる。

更に鏡背には出土時に赤色顔料が付着していたため当理藏文化財センター本田光子氏に鏡修

土壤一覧

番号	区名	形狀	法量(m)			長軸方位	造構時期	備考
			縦長	横長	深さ			
SK01	I	円形	1	0.7	0.3	N-16°-E		
SK02	II	長方形	1.97	1.48	0.51	N-72°-E		石蓋土壤幕、彷製鏡・刀子削器
SK03	II	不整方形	1.3	1.2	0.4	N-31.5°-E		SC-01住居址より新しい
SK04	II	長方形	1.8	0.52	0.23	N-84°-W		
SK05	II	長方形	0.9	0.35	0.25	N-33°-E		石蓋土壤墓
SK06	II	長~方形	2	0.7	0.12	—		
SK07	II	長方形?	4.7	—	0.15	—		住居址か
SK08	II	長方形?	1.65	2.2	0.16	—		
SK09	II	長方形?	0.9	0.55	0.035	S-70°-E		
SK10	III	長方形	2.35	0.41	0.1	N-18°-E		
SK11	II	長方形	1.7	0.52	0.4	N-2°-E		
SK12	III	長方形	1.75	0.56	0.17	N-76°-W		
SK13	III	円形	—	—	—	—		
SK14	III	長方形?	—	—	—	—		
SK15	III	円形	0.55	0.5	0.35	N-S		焼塙土壤
SK16	III	長方形	1.5	0.96	0.5	N-90°-E		近世墓か
SK17	III	長方形	1.52	0.51	0.12	N-13°-E		SK18より古い
SK18	III	不整方形	0.8	0.82	0.12	N-77°-W		SK17より新しい
SK19	III	長方形	2.1	1	0.3	N-S		
SK20	III	不整円形	1	0.55	0.15	—		

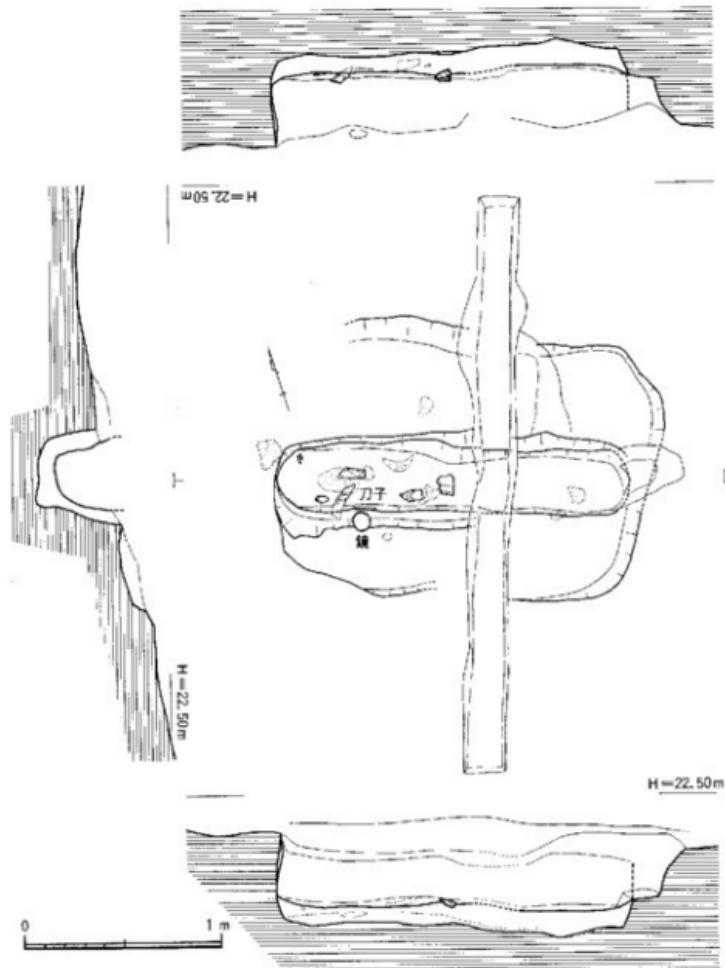


Fig. 10 SK02土壤出土状況実測図 (1/30)

復と赤色顔料の分析を依頼してその結果を得たので以下に記すこととした。

「小形彷製鏡の保存処理」

「鏡は出土時に非常に脆弱であったため、1989年1月27日アクリル系合成樹脂を塗布含浸して強化後取りあげられたものである。

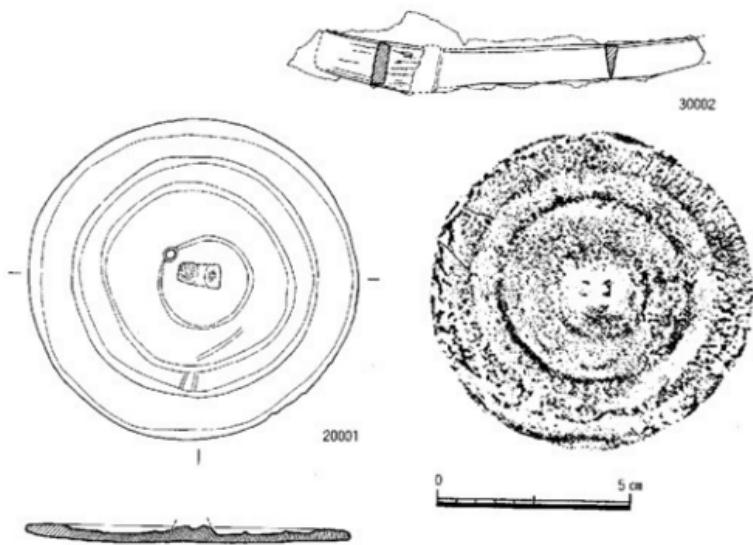


Fig. 11 SK02土壤出土遺物実測図 (2/3)

遺物表面は粘土質の土に厚く覆われていたが、鏡背にわずかな部分本来の面が認められた。縁辺部は脆く粉状に崩れており、鏡内部全体が灰緑色粉状の鏽と化していることが窺われた。メス・カッター等で軽く土を落した後、アクリル系合成樹脂（ベンゾトリアゾール含有）を浸漬含浸した。強化後に再度メスにより土を除去したが、土だけを取るのはなかなか困難で十分にはできなかった。鏡面の一部をかろうじて出すところまでしかできなかった。なお、鏡背の上の一部に赤色顔料が付着していたのでこの部分はそのまま残した。

辺縁部の細片は比較的大きな2片のみ接合し、接合した部分を安定させるため周囲を補填した。辺縁の欠けた部分も同様の目的で補填した。接合・補填にはセルロース系接着剤とガラスマイクロバルーンを用いた。補彩はアクリル絵具を使い、鏡背面だけに行なった。』と。

また鏡背に付着した赤色顔料についての分析結果は以下の通りである。

「鏡背に付着している土の上に赤色顔料がわずかに認められた。

針先に付く程度を探り、プレパラートを作成し、顕微鏡観察したところ、ベンガラと思われた。パイプ状の粒子はみとめられなかった。

付着したままで蛍光X線分析、X線回析の測定を行なった。赤色顔料の主成分元素としては鉄が検出された。赤色顔料の顕著な鉱物成分は同定されなかった。

以上の結果から鏡に付着している赤色顔料はベンガラであると判断した」と。

なお土壤内部にあった赤色顔料については調査時に頭部邊のものと周囲が混じったと判断したので分析を行なわなかった。

鉄刀子 30002は、遺体の肩辺におかれた刀子である。全体に銹化が進んでいるが、全長10.5cmで、身部は長さ6.5cm前後を測る。

また身部幅は1~1.1cmと狭い。柄側の茎部には木質が残る。

SK03土壤 (Fig. 12・24)

II区 SK01住居跡の床面で検出され、遺構の重複から同住居跡より新しい時期の所産である。土壤はやや東西に長い長方形を呈する。規模は長辺長1.4m、短辺長1.3m程度であり、深さは40~50cm程度を残すが住居跡埋没後に掘られている為に更に深かったと考えられる。

床面は浅い3個のピット状のものがみられるが本来的にともなうものではなかろう。

壁面は東・南壁を除いて粘土を貼付した痕跡があり、火を受けて赤色に変化している。位置は床面より10~20cmの部位以上に残っているが、土壤埋土中からは焼けた粘土片が多く出土し、他の壁面からも剥落した結果ではないかと考えられる。

土壤は埋土中に炭化物などを殆ど含まないが、火を焚いたのは明らかであるが性格を十分に把握できない。埋土中より須恵器壺蓋(00054)や子持勾玉(10003)が出土した。

出土遺物 (Fig. 24)

子持勾玉 10003は滑石利用の扁平な子持勾玉である。全長3.7cm、幅1.3cm、孔径2mmをはかる。くびれの中間点よりやや下った位置に子勾玉をつくり出している。背部もケズリ整形時の棱を多く残し、十分な研磨は行なわれていない。

SK04土壤 (Fig. 13)

II区のSK02土壤の南側2m程のところにはほぼ平行して営まれた土壤である。平面形は長方

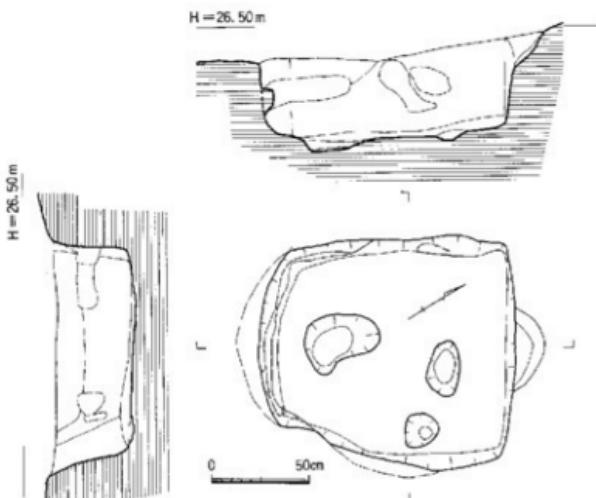


Fig. 12 SK03土壤出土状況実測図 (1/30)

形を呈し、東西長辺長1.8m、南北短辺長0.5m強をはかる。深さは0.23m程度を残す。

土壙は、小口および側辺部も立あがりは緩く、床面は平坦に整えられていない。現況埋土上面に長径50cm、短径30cm、厚さ8cm程度の扁平玄武岩礫が乗っているが、原位置をとどめないものと考えられる。

埋土は、ほぼ4層に区別することができる。上層よりI層（暗黄褐色粘質土、2層（径3~4mmの砂粒混りの赤褐色粘質土）、3層（暗赤褐色粘質土）、4層（やや黄色味をおびた暗赤褐色粘質土に粗砂を多く含む）である。壙内から副葬遺物は全くみとめられなかった。本来石蓋土壙墓であったと考えられる。

SK05土壙 (Fig. 14)

土壙はSK02土壙の西側2mの位置に近接して営まれている。

土壙掘方は、長軸長98cm、最大幅35cmをはかり、両端部がすぼまる形態となる。深さは30cm程度の小型のものであり、この掘方にあわせるように花崗岩の扁平礫が蓋として置かれている。蓋材の厚さは10~12cmである。

土壙内は、花崗岩バイラン上で埋積され、副葬遺物は出土しなかった。小児用埋葬施設と考えて良かろう。

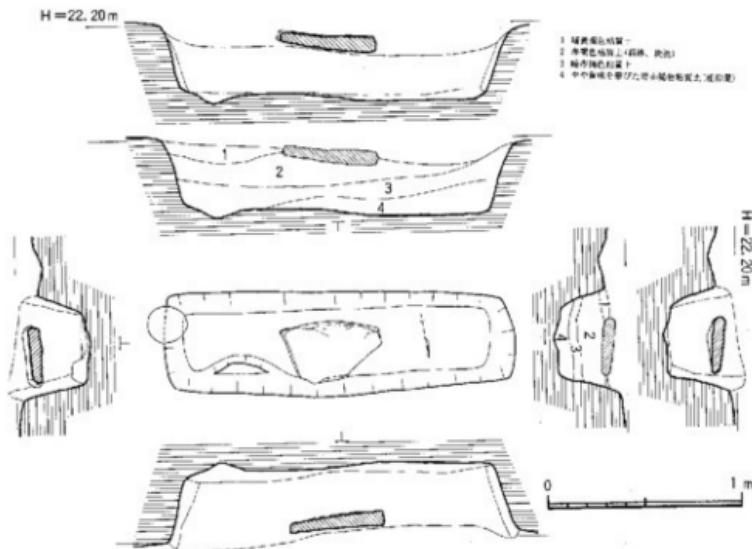


Fig. 13 SK04土壙出土状況実測図 (1/30)

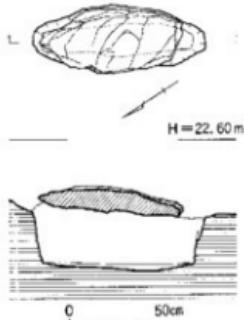


Fig. 14 SK05 土壙出土
状況実測図 (1/30)

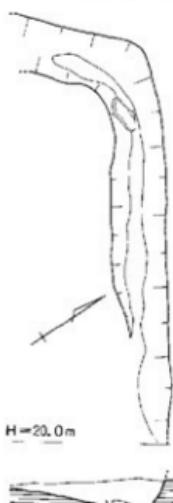


Fig. 15 SK06 土壙出土

遺物実測図 (1/30) II 区西端の調査区に一部かかった土壙である。隅丸長方形をなし、現存長 1.9m、幅 0.6m、深さ 5cm 程の規模であり、断面の土層堆積からも浅い土壙である。東側にひろがる握立柱建物群と関連があるのであれば雨落溝などの施設である可能性も考えられる。

SK06 土壙 (Fig. 15・23)

本遺構は、II 区南端に近い段おちで検出された。遺構は北側にコーナーをもつ溝状をなし、幅 30cm、深さ 20cm、残存長 2m をはかる。溝状遺構内では疊とともに土師器高坏、須恵器坏蓋が出土した。竪穴住居跡の残欠か。

出土遺物 (Fig. 23)

須恵器坏蓋 00014 は口縁端部が小さく屈曲する蓋である。天井部との境は一条の浅い沈線を施しており、天井部はカキ目状の調整となる。

天井部外面以外は回転ナデを施している。器色は暗灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径 15cm、残存高 2.2cm をはかる。

土師器高坏 00015 は脚裾部が短くひらく高坏である。器面は焼成後の剥落がいちじるしく、器色は暗赤褐色を呈する。胎土は石英粗砂を多く含みあまり良好でない。焼成も軟質である。脚裾部径 13.2cm を測る。

SK07 土壙 (Fig. 32)

II 区南端 SK06 土壙の東側に隣接して営まれている。遺構は幅 30cm、残存長 5m 程度の溝状遺構であり、同遺構と同様に竪穴住居跡の溝であるかも知れない。出土遺物はみられなかった。時期は不詳である。

SK08 土壙 (Fig. 32)

II 区南端の段おち部分に検出された。方形あるいは長方形土壙の西側コーナーと考えられる。現存では西辺長 1.6m、北辺長 2.4m を残し、深さは 20cm 程度しか残さない。底面は平坦であり、SB01～03 建物の桁行軸とほぼ一致する点で時期的に関連をもつものかも知れない。

土壙の埋土は暗褐色粘質土であるが、埋土内からは明らかな遺物類が出土しなかった。

SK09 土壙

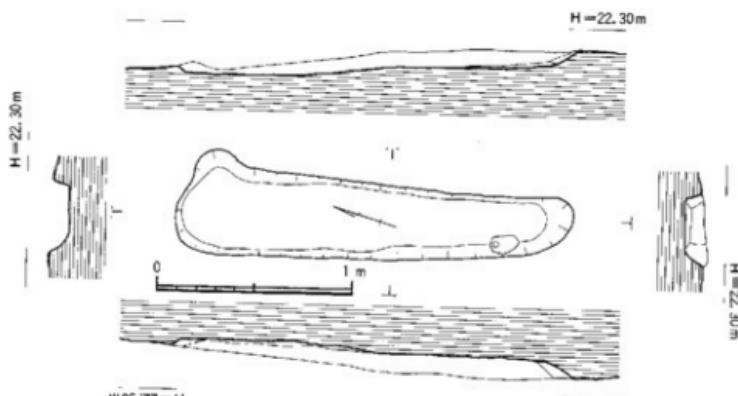


Fig. 16 SK10土壤出土状況実測図 (1/30)

SK10土壤 (Fig. 16)

III区最高部に位置し、長軸を N-18°E にとる土壤である。形態は北側部分がひろいバチ形の平面形をなす。規模は、長辺長2.35m、短辺長0.41mで、深さは僅かに0.1mを残すのみである。

土壟内より副葬遺物などの出土はなかったが、SK02上壤の埋土（暗褐色粘質土）が類似し、形態上も北側小口部が幅ひろくなる類例がある点で墳墓と考えて良かろう。

SK11土壤 (Fig. 17)

II区 SK02土壤の東側に隣接し、ほぼ直交する位置に検出された土壤である。

出土方位は N-2°-E と南北を向いている。平面形は長方形をなし、長辺長1.7m、短辺長0.52m、深さ0.4mを残す。北側小口部はややオーバーハング状態であり、頭部方向を示すものかも知れない。遺物は出土しなかった。

SK12土壤

(Fig. 16・23)

III区北端部に検出された土壤で、丘陵裾部斜面に近い位置にあた

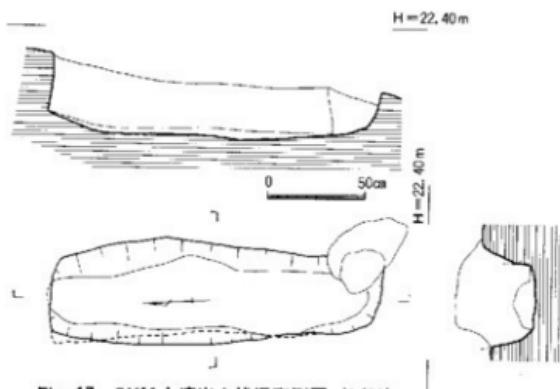


Fig. 17 SK11土壤出土状況実測図 (1/30)

る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸が N-76°-W とほぼ東西方向に向いている。

規模は、長辺長1.75m、短辺長0.56mで深さ0.17mを残すにすぎない。土壌埋土は淡褐色粘質土で、埋土中より土師器、須恵器類が出土した。

出土遺物 (Fig. 23)

土師器高台付塊 000057は、薄手の体部に細く外方にふんばる高台を有する塊である。

器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。高台径7.9cmをはかる。

土師器高坏 00015は坏部を失う高坏である。低い柱筒部から裾がゆるく開く。器色は赤褐色を呈し、内面にヘラ削りが残る。胎土は粗砂混りで、焼成堅緻である。脚高4.6cm、脚幅4.6cm、脚径8.6cmをはかる。

須恵器坏蓋 00056は器高の非常に低い坏蓋である。天井部は殆ど平坦で、内部のかえりも低いものである。器色は暗灰色を呈し、胎土に粗砂多く、焼成堅緻である。口径9.4cm、器高1.5cmをはかる。

須恵器坏身 00055は受部立あがりの低い坏身である。底部のヘラ削りも小規模である。器色は淡灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径11cm、器高2.8cmをはかる。

SK13土壤 (Fig. 23)

III区北端の丘陵裾部に位置する土壤で、SK12土壤の南側10mにあたる。形状のよく把握できないものである。あるいは地形的な変換部であるかも知れない。埋土中より須恵器、土師器類が出土した。

出土遺物 (Fig. 23)

須恵器坏蓋 00062は生焼けの坏蓋である。器色は淡灰色を呈し、胎土に粗砂を含む。焼成は軟質である。口径10.8cm、器高3.1cmをはかる。

須恵器坏身 00063は受部立あがりの内傾化のいち

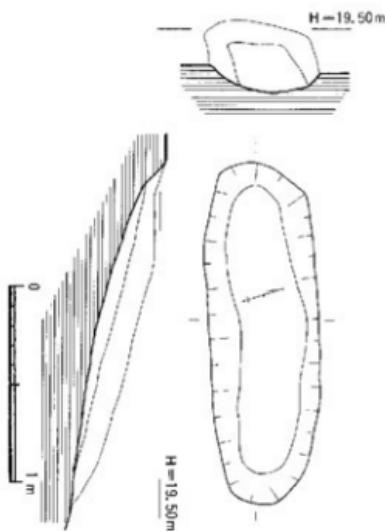
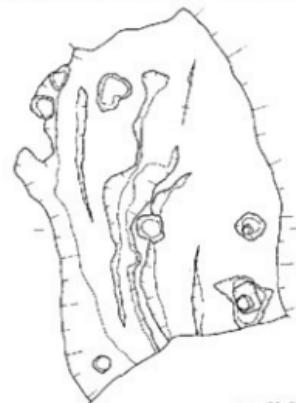


Fig. 18 SK12土壤出土状況実測図 (1/30)



じるしい小型の壺身である。底部外面に緩くヘラ削りを残す以外は内外面ともに回転ナデを施し、内底部にナデがみられる。器色は青紫灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径9.4cm、器高3.3cmをはかる。00060は全体的に整形の鈍い壺で、底部に緩い回転ヘラ削りを施し、他の内外面には回転ナデを加える。受部は立あがりが低く、直立する。器色は灰白色を呈し、胎土に砂粒の混入多く、焼成堅緻である。口径10cm、残存高4.2cmをはかる。00065も器高の低い壺である。受部の立あがりは内傾化がいちじるしい。底部は緩いヘラ削りを施し、他の内外面は回転ナデである。底部にヘラ記号あり。器色は青灰色を呈し、胎土1~2mmの粗砂を多く混入する。焼成は堅緻である。口径12cm、残存高3.1cmをはかる。

須恵器盤 00070は焼けひずみの著しい盤である。調整は底部外面にヘラ削りを施し、他の内外面には回転ナデを加えている。また、内底部にはナデが残る。器色は暗灰色を呈し、胎土に石英砂粒1mm程度のものを多量に含む。焼成は堅緻である。口径18cm、残存高4.3cmをはかる。

須恵器壺 00061は口縁部のみ残る壺である。端部は肥厚し、沈線状に産む。調整は内外面ともに回転ナデである。器色は暗灰色を呈し、胎土に石英砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。口径14cm、残存高4.4cmをはかる。

土師器把手付壺 00069は胴部の膨らみの大きい壺で、最大径部に把手をつける。口縁は分厚く、「く」字形に外方におれる。調整は外面に荒い縦ハケ目を施し、内面口縁は横ナデである。また胴部内面は全て底部からのヘラ削りである。

器色は外面が黄色味をおびた淡灰白色、内面が黒褐色を呈する。口径30cm、残存高24.2cmをはかる。

SK14土壤 (Fig. 19)

Ⅲ区南半部斜面の中位に位置する不定形の土壤である。斜面にあるため辺全長などの規模を知り得ない。本来の形状は長方形か。埋土内より鉄滓が出土している。

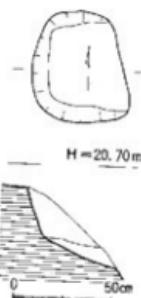


Fig. 20 SK15土壤出土遺物実測図 (1/30)

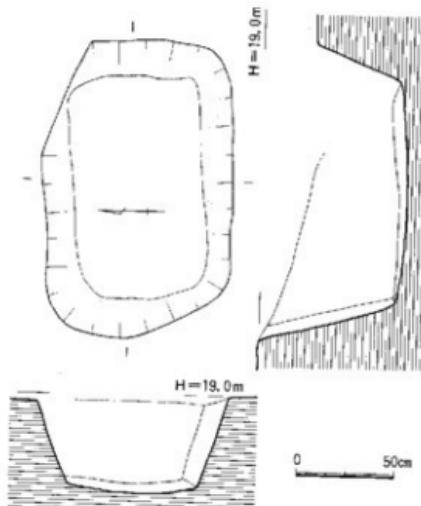


Fig. 21 SK16土壤出土状況実測図 (1/30)

SK15土壤 (Fig. 20)

Ⅲ区中央部付近に位置する小土壤である。近世灌漑用水路掘削によって東半分を失なっている。

上壤はいわゆる「焼壁土壤」である。現存規模で長辺長0.55m、短辺長0.5m、深さ0.35mを残し、本来円形を呈するものと考えられる。土壤埋土は暗褐色粘質土であり、壇内より遺物の出土はなかった。

SK16土壤 (Fig. 21)

Ⅲ区北端部で検出された長方形土壤である。調査前にはこの土壤上に花崗岩角礫を立石とした施設があり、地元では戦乱による死者を埋葬供養した跡と伝えられていた。

調査では表土除去後にプラン検出を行ない、調査区北側壁にかかる土層断面観察とあわせて本土壤の時期をはかった。これによると本土壤は現表土下より掘こまれ、埋土は焼土、木炭塊を多く混入した黒灰～暗黄灰色砂質土であって、床面に薄い炭層がのり異臭がしたものである。内部主体は本棺であり、近世以降の所産であろうと思われる。

SK17土壤 (Fig. 22-24)

Ⅲ区北半幅部に位置する長方形土壤である。隣接するSK18土壤に切られ、これより古い時期の所産である。これまでの時期の明らかな土壤の中では比較的整った形状を呈する。

規模は長辺長1.52m、短辺長0.51mで深さは僅かに0.12mを残す。中央部よりやや北側の両側壁下には土師器壺が1個づつ計2個おかれ、土壤裏の副葬土器と考えられる。なお出土壺は2個ともに底部を上にして、倒立状態であった。

出土土器 (Fig. 24)

土師器壺 00071は口縁が薄づくりで、直線的に外方にひらく壺である。調整は体内外面ともに回転ナデを施している。また底部はハラ切り離しである。器色は明橙色を呈し、胎土に微砂粒を含む。焼成は堅緻である。口径13.1cm、器高3.6cmをはかる。完器である。00072は11

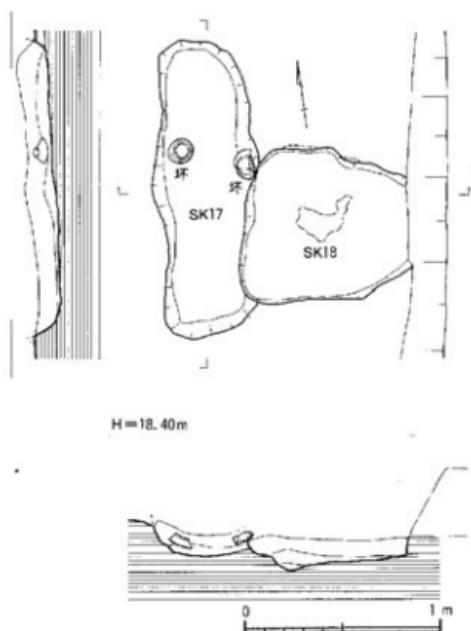


Fig. 22 SK17・18土壤出土状況実測図 (1/30)

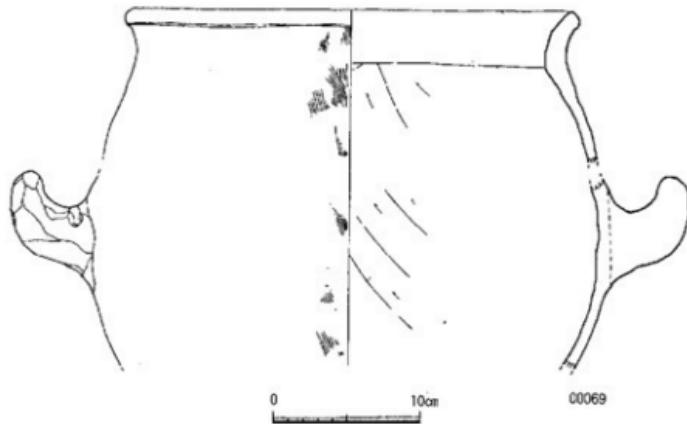
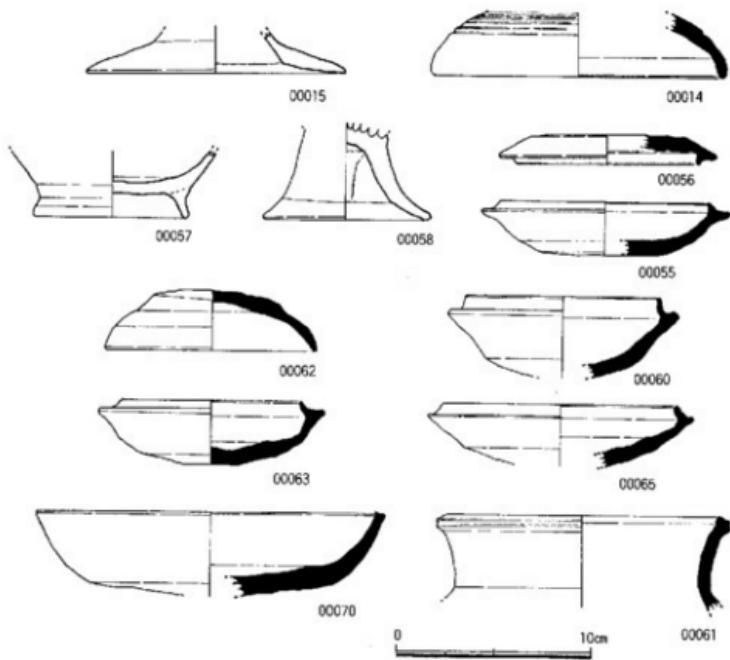


Fig. 23 土壤出土遺物実測図(1) (1/3、1/4)

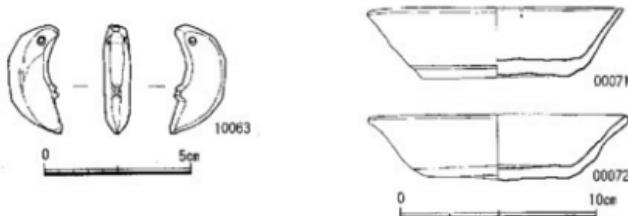


Fig. 24 土壙出土遺物実測図(2)

縁をやや折り曲るように外側に引出した坏である。調整は内外面ともに回転ナデを加え、内底部にはこの後ナデを施す。また底部はヘラ切り離してある。器色は明橙色を呈し、胎土に雲母片を含む。焼成は堅緻である。口径13cm、器高3.3cmをはかる。ほぼ完器であり、口縁端に一部黒斑がある。

SK18土壙 (Fig. 22)

Ⅲ区に位置し、土壙墓SK17土壙を切っている。表土（暗赤灰色粘質砂土）下35cmでプランが把める。プランは不整な方形を呈し、壁高10cmを残す。壁のうち北壁は一部に壁の焼けた部分を認めうる。また床面はゆるく変化し、土壙内埋土は基本的に黑色炭化物で占められる。また床面上には焼土塊がみられ、内部で火と焚いたのは明らかである。

本土壙の性格については詳らかでないが、他の焼壁土壙と関連をもつものであるかも知れない。

SK19土壙

Ⅲ区丘陵裾の最も低地部に位置する不整長方形の土壙である。長辺長2.1m、短辺長1mをはかり、深さも0.3m程しか残さない。埋土は暗褐色粘質土であるが古墳時代以降の土師器破片が若干出土しており、SK18土壙などと同時期の所産と考えられる。土壙の性格については不詳である。

SK20土壙

Ⅲ区 SK19土壙の南側に隣接する土壙である。緩いコーナーをもつ浅い土壙であるが、埋土が暗褐色粘質土である点以外は、時期を示す特徴的遺物は出土しなかった。

以上土壙20基について記したが、前述のように傾斜地という立地上で以降の遺存が非常に悪く、時期・性格を物語る該期の遺物を伴うものは殆ど無いといつても良い。

しかし乍ら、大まかに土壙群は弥生時代終末期と考えられる土壙墓・石蓋土壙墓の一群、平安時代後期土壙墓群、その他に区別できると考えられよう。

3) 溝 (Fig. 25~27)

溝状以降はⅡ区で3条が検出された。これらは形状・規模ともに異なるが何れも北西より南東方向に向けて流下する構造となっている。またこれら3条の溝の北側延長は第2次調査の調査区内に含まれるにも拘らず、検出できず、北端部が削平を受けたか或は本来的に立あがり部分に近いものであったかの何れかであろうと考えられる。

SD01溝 (Fig. 25)

本溝は、総延長が25m以上、幅0.75m、深さ0.25cmと浅い小形の溝である。断面は内壁が緩く、東壁がそばだった箱形を示している。西側壁がSC01住居跡の北側コーナー近くに重複しており、これより新しい。

出土遺物 000019は須恵器壺身である。受部の立あがりは低く、小形の製品である。00020は手捏ねによる瓶のミニチュア土器である。胴中位の把手は上下左右から指でつまみ出している。極めてリアルな作品である。

SD02溝 (Fig. 26-27)

SD01溝の東側にはほぼ平行する溝である。溝掘方は断面図にみるとように巾3mのうち両側部は浅く、中央部に従って緩かに深くなり、中央は断面「コ」字形の形状となる。総延長27m以上、深さ1mをのこす。出土遺物は該期の磁器類などが出土した。

出土遺物 00024は玉縁口縁を有する白磁碗である。器色はややくすんだ白色を呈し、器面はやや荒れている。復元口径16cmをはかる。

00023も白磁碗底部である。残存部外面は無施釉で、内面に淡い緑白色釉を薄くかける。内面底部と見込みとの境には一条の沈線を施す。底部径7.2cm、残存高2.4cmをはかる。

00022は須恵器壺蓋である。口縁端部がほぼ直立する特徴を有し、天井部のヘラ削り調整は一部に限られ、輪轆は逆時計まわりである。天井部以外は内外面ともに回転ナデを施す。また天井部にヘラ記号を残す。

溝一覧

番号	地区	形 状	法 量 (m)			長軸方位	遺構時期	備 考
			継 長	横 長	深 さ			
SD01	II	—	25	0.75	0.25	—	古墳時代後期	
SD02	II	—	27	3	1	—	中世期	断面V字形
SD03	II	—	17	3.5	1.2	—	中世期	断面V字形

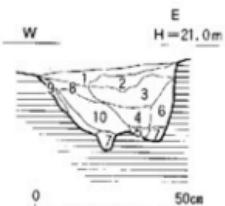


Fig. 25 SD01溝土層断面図 (1/20)

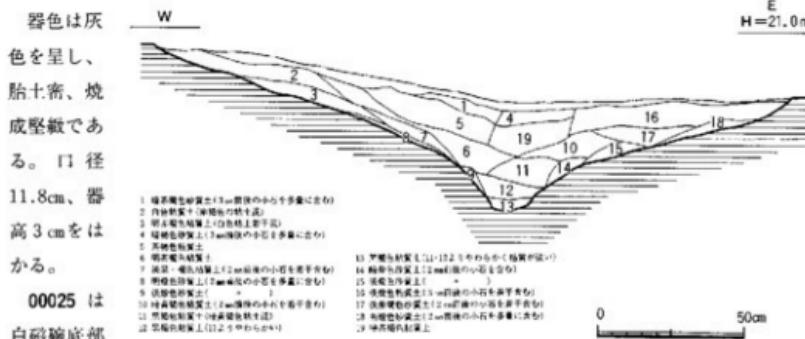


Fig. 26 SD02溝土層断面図 (1/40)

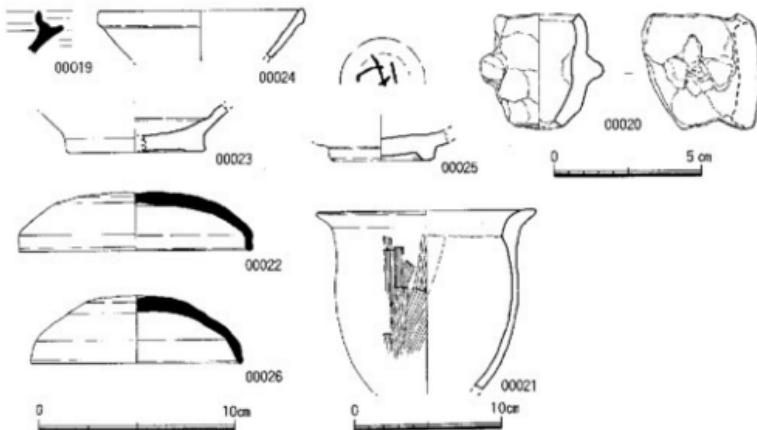


Fig. 27 溝出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)

4) 製鉄炉 (Fig. 28-29)

SG01炉跡 Ⅲ区南半斜面裾に位置する。

第1次調査地区では、造構検出面・遺物包含層あるいは造構埋土中より度々鉄滓の出土することが知られていた。第Ⅱ区の土壤・清状造構および造構検出面より計9,140 g、第Ⅲ区では炉内および炉周辺・造構検出面より28,175 g、また第Ⅰ区では35 gが出土した。何れも径5 cm内外の球果状をなすもので計57.59 kgもの鉄滓が出土した。

炉址は、長軸を東西よりやや北にとる。平面的には一部窯壁の残る東半部とこれに接続する土壤部とに区別される。

窯壁の残る東半部は窯本体と考えられ、現存内法で長辺0.8m以上、短辺長0.65mを測る。長辺の延長は東に延びるが現在の熊添池の波触によってすでに失われているが、窯体の平面形は長方形縮形炉と考えて良からう。窯体は幅10cm残存部で高さ20cmをはかるが、西に連続する不整形円形の土壤上にも炉長辺壁と直交する方向に窯壁片が立っており、窯体がこちらまで延びるのかも知れない。また土壤の西端は隅丸長方形をなし、この土壤より緩く立あがっている。窯の構造の検討については類例の増加をまちたい。

なお、窯上部に小屋掛けなどの施設があるのでないかと考え柱穴群の精査をおこなったがまとまらなかった。またこの窯跡内および周辺より出土した鉄滓の量は計28,175 kgであった。

出土遺物 (Fig. 29)

炉跡土壤埋土中より若干の遺物が出土した。

須恵器塊 00073は底部を欠く塊である。直立する口縁にややとがり気味の底部を有する。器面調整は、底部が不定方向のヘラ削りを施す。体部は外面がカキ目調整、内面は回転ナデである。器色は淡

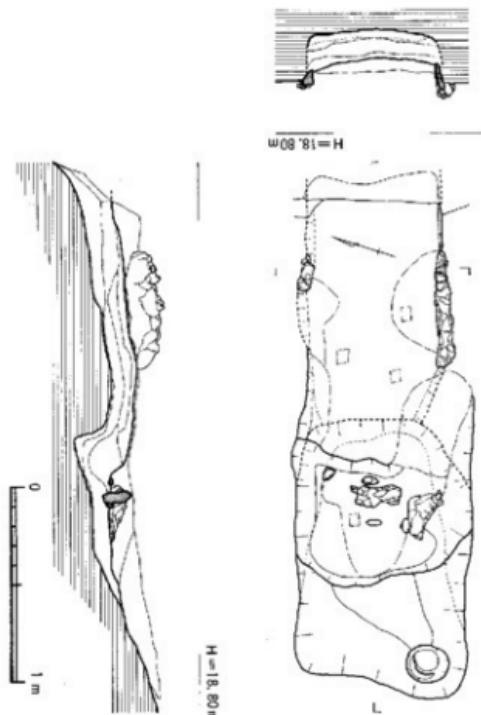


Fig. 28 SG01炉跡出土状況実測図 (1/30)

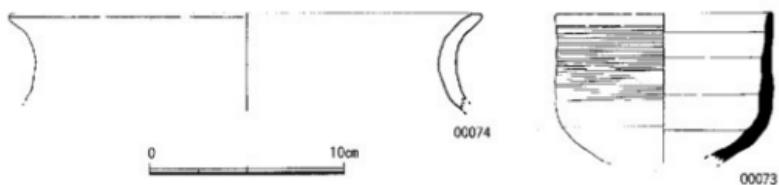


Fig. 29 SG01炉跡出土遺物実測図

灰白色を呈し、胎土に径1mm程度の石英砂を混入する。焼成はやや軟質である。口径11cm、残存高7.6cmをはかる。

土器器蓋 00074は土器器蓋破片である。外面ともに器面が磨滅している。外面ヨコナデ調整、器色は赤褐色を呈し、胎土に石英砂・赤褐色土粒混入する。焼成はやや軟質である。口径24cm、残存高4.4cmをはかる。

5) 道路状遺構 (Fig. 30-31)

SG01の西側から北に向い幅1m、長さ20m程の細長い、よくしまった平坦部が観察された。これは傾斜面の山側に人为的に掘削を加え、直線的に整形したものでSK20土壤方向に続いている。路面と考えられる6層(淡黄灰色砂質土上には部分的にではあるが炭化物。焼土破片が散りしかれたように貼付いていた。出土遺物整理の結果では時期的にそれほど幅をもたないことが判った。この道路状遺構はSG01炉跡操業と関連する通路であると考えられるかも知れない。

出土遺物 (Fig. 31)

須恵器坏蓋 00075は口縁部かえりのない蓋破片である。残存部の上端に一部ヘラ削りがある。他は外面ともに回転ナデである。器色は淡青灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径11cm、残存高2cmをはかる。

00081は焼けひずみの大きい蓋で長円形を呈する。天井部の半部以上は時計まわり方向のヘラ削りである。他は外面ともに回転ナデである。器色は晴青灰色を呈し、胎土に径2~3mm程度石英砂を混入する。焼成は堅緻である。口径11.6cm、高さ4.1cmをはかる。

00076も同器形の蓋である。天井部の約2/3に回転ヘラ削りを加える。他は横なでで天井内部に不定方向のナデがみとめられる。器色は灰白色を呈し、胎土に径1mm程度の石英を混入する。焼成は堅緻である。口径11.4cm、器高3.9cmをはかる。

須恵器坏身 00078は受部立あがりの低い坏身である。調整は外面ともに回転ナデで、橈輪回転方向は逆時計まわりである。器色は暗青灰色を呈し、胎土に石英砂粒の混入がある。焼成は堅緻である。口径10.8cm、器高3.6cmをはかる。

00083は体部の殆どを欠失する身である。受部立あがりは低く、内傾化している。調整は外面ともに回転ナデを施す。器色は青灰色を呈し、胎土に若干破粒を含む。焼成は堅緻である。口径12.2cm、残存高2.1cmをはかる。

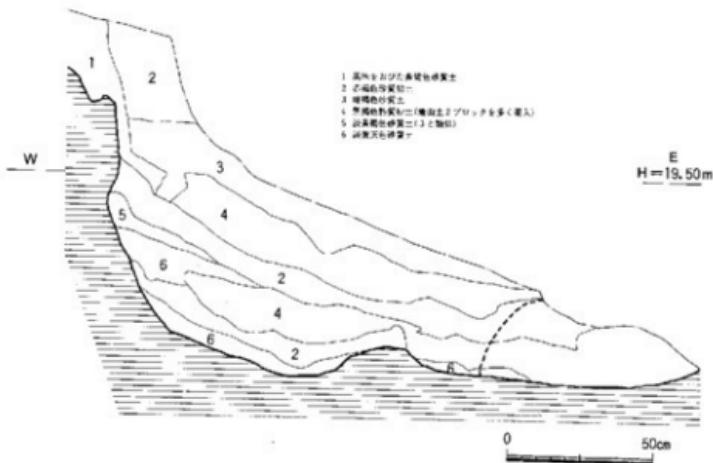


Fig. 30 SF01道路東西土層断面図 (1/20)

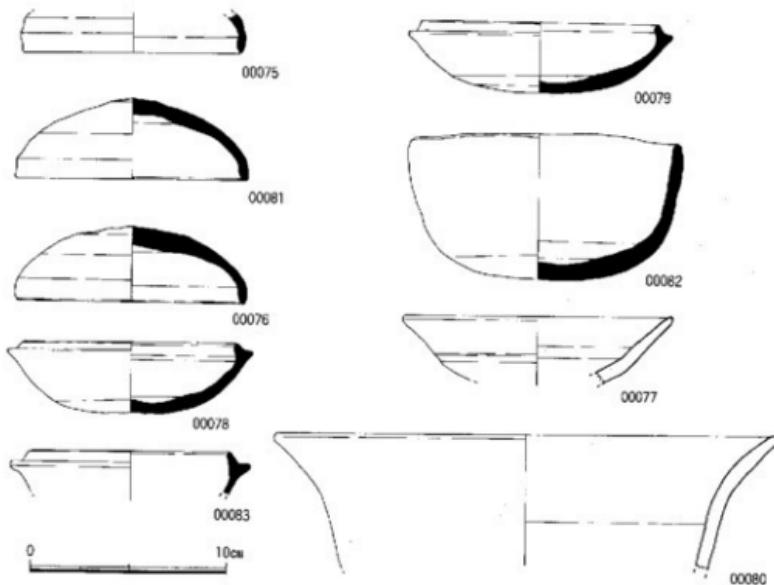


Fig. 31 SF01道路状遺構出土遺物実測図 (1/3)

00079も器高低く、受部立あがりの弱い坏身である。底部は回転ヘラ削りで、他は内外面ともに回転ナデである。また内底部にはアテ具痕がのこる。器色は淡灰白色を呈し、胎土密である。焼成は軟質である。口径12cm、器高3.6cmをはかる。

須恵器塊 00082は緩く内湾気味に立あがる口縁に鈍い底部を有する塊である。底部外面にヘラ削りが残る以外は全て回転ナデである。器色は灰白色を呈し、胎土に石英・長石を多く含む。焼成堅敏である。口径13.3cm、器高7.5cmをはかる。

土師器高坏 00077は小型高坏の坏部である。口縁と体部の境は沈線状に窪む。内外面ともにナデか。器色は赤褐色を呈し、胎土に微砂を多く混入する。焼成堅敏である。口径13.6cm、残存高3.4cmをはかる。

土師器鉢 00080は薄手つくりで、口縁が花弁状に外方に開く。器面は磨滅がいちじるしい。器色は明橙色を呈し、胎土に径1~2mmの石英・長石を多く混入する。焼成はやや軟質である。口径25.4cm、残存6.8cmをはかる。

6) 挖立柱建物・柵 (Fig. 32)

II区南側段おち部に検出され、東を走るSD02・03溝の西側に位置する。掘立柱建物3棟分、柵列1条である。

掘立柱建物 (Fig. 32)

SB01建物 II区傾斜面に建った東西棟建物である。梁行一桁行が2×3間の規模である。実長は梁行2間-4m、桁行3間-5.8mとなる。また梁・桁の各々の柱間は2×1.8mのサイズである。床面積は約23.2m²をはかる。

柱掘方は削平されているため旧状を知り得ないが最大値で径50cm程度があり、更に平面サイズは大型であったと考えて良いであろう。また掘方柱痕から柱径は20cm程度であると考えられる。

SB02建物 (Fig. 32)

SB01建物の東側には平行して営まれている。この建物の規模は梁行1間以上、桁行6間と考えられるが、柱間が全体的に短いところから梁行は2間以上になる可能性がある。

梁・桁行の実長は1~1.3以上×5.3mと考えることができる。また柱間は1~1.3×1~1.6mと不揃いの数値を示している。

また柱掘方は、径50cm程では統一的にみることができる。掘方内の柱痕観察から約柱径は20cm前後と推定することができる。

SB03建物 (Fig. 32) SB02建物に重複して更に東側にこの建物がある。建物は出土輪と前二棟よりやや東に振るものである。建物は委側の規模を全部残していないが、梁・桁行の規模は2×3間以上となると思われる。

梁・桁行の実長は現存で2×3.8m以上となる。

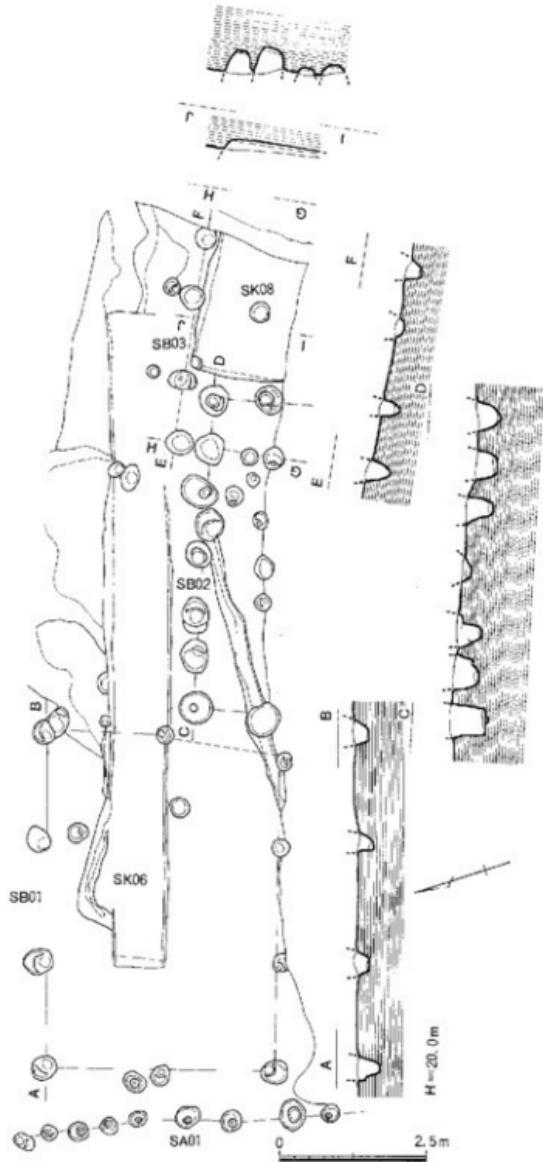


Fig. 32 SB01 · 02 · 03掘立柱建物跡出土状況実測図 (1/100)

これらの掘立柱建物の柱穴からは時期をはかる土器類は出土していない。

構 (Fig. 32)

SA01構 この構あるいは垣と考えられる柱列は、SB01建物の両妻側には平行して走り、ほぼ5.5mの延長がみとめられる。

柱列は9本の径25~50cmの大小の掘方をもつて直線的に並かれている。

以上のような掘立柱建物および付く列は柱通りの方向や上部構造を考えると少くとも2時期は時期的差がみとめられると考えられる。

またこれらの掘物群は東側のSD02-03溝を防護施設と考えると計画的に造成工事をともなって造営された施設群と考えられるかも知れない。

7) 表土・表採の遺物 (Fig. 33)

第1次調査Ⅰ~Ⅲの各区では遺構より遊離した遺物類がまとめて出土した。前述の鉄滓をはじめとして、6世紀~7世紀初頭期の須恵器類や黒煙石・サヌカイトを素材とする無茎石器類・スクレイバー・二次加工のある剝片、玄武岩製磨製石斧などの石器類とともに滑石製紡錘車、鉄鎌などが採集されている。

特に時期的に遺構を伴なわない石器類は調査地点東側に隣接する熊添池の周辺汀線で数多く採集できるため旧石器時代後期~縄文時代遺跡が周辺地域に分布していることが知られる。以下では採集遺物の若干について説明を加えることとしたい。

須恵器壺蓋 00107は口縁部が直立し、端部が細かく外側におれる蓋である。天井部のヘラ削りは小さく、他の内外面は全て回転ナデ調整である。器色は灰色を呈し、胎土に径1mm程度の砂を混入する。焼成は堅緻である。口径10.9cm、器高3.7cmをはかる。Ⅲ区出土。00101は口縁端部を丸くおさめる。天井部は剥落がみられるが、調整はヘラ削りと考えられる。他は内外面ともに回転ナデである。器色は淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。口径11.2cm、復元高3.5cmをはかる。Ⅲ区出土。00027も口縁端部が屈曲し、天井部が平坦となる蓋である。天井部はヘラ削り、他は回転ナデで天井内面にナデがみられる。器色は青灰色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径12.6cm、器高3.8cmをはかる。Ⅱ区出土。00086は擬宝珠つまみを有する蓋である。低いつまみの周辺天井部は回転ヘラ削りを加え、他は回転ナデである。器色は灰白色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径16.2cm、器高3.3cmをはかる。Ⅲ区出土。00086はやや大型の壺蓋である。口縁端部が長く、内面ののかえりは小さく、低い。器色は灰白色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。復元口径17cm、復元高3.7cmをはかる。Ⅲ区出土。00085は器高が低く、口縁端部がつづまつたつくりのつまみ付蓋である。器色は灰白色を呈し、胎土に径1~2mmの石英砂を混入する。焼成は堅緻である。復元口径15.4cm、復元器高3.2cmをはかる。Ⅲ区出土。

須恵器高台壺 00028は壺底部端よりややはいった位置に低い高台をつける。内底部には回転ヘラ削り、他は回転ナデである。器色は青灰色を呈し、胎土に1mm以下の微砂を混入する。

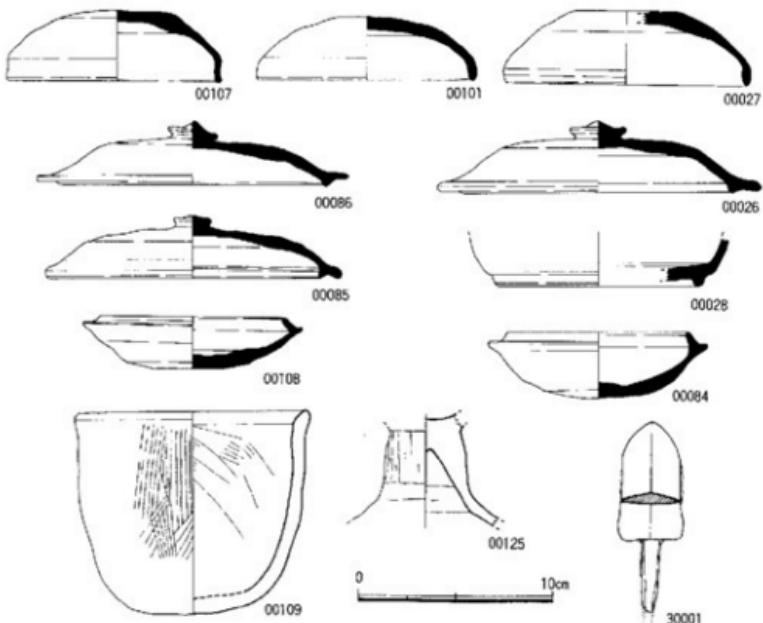


Fig. 33 第1次調査表土・表面採集遺物実測図

焼成堅緻である。高台部径10.4cmをはかる。II区出土。

須恵器坏身 00108は浅く、受部立あがりが非常に内傾化した口縁を有する。底部はヘラ削り後の調整不良。他の内外面は回転ナデで、内底部にはナデが残る。器色は外面青灰色、内面白灰色を呈する。胎土に石英砂を混入し、焼成は堅緻である。口径9.6cm、器高2.7cmをはかる。III区出土。00084は口縁など各部つくりのしっかりした小形坏である。底部にヘラ削り、他は回転ナデである。器色は外面暗青灰色、内面セピア色を呈する。胎土に径1~2mmの石英砂を混入し、焼成は堅緻である。口径9.5cm、器高3.5cmをはかる。III区出土。

土師器小形壺 00109は端部が短く外方に開く小形壺である。口縁端部内外面は横ナデ、胴部外面は荒い継ハケ目を施す。また底部付近はナデ調整である。内面は荒い斜ハケ目を施す。器色は暗黄褐色を呈し、胎土に径1~5mmの粗砂を混入する。焼成は堅緻である。外面~内面の一部にかけ全体の1/4程度に黒斑がこられる。口径は12cm、器高10.5cmをはかる。III区出土。

土師器高坏 00125は短脚を有する高坏である。脚筒部は瘦いながら、中央部が膨らんで脚端へとひろがる。器面調整は、脚筒部は下方からのヘラナデ、裾部は横方向のナデである。また内面は横方向のヘラ削りを加える。器色は明赤褐色を呈し、胎土に径1mm程度の石英砂を多

く混入する。焼成は堅緻である。脚筒部最大径は4.3cmをはかる。Ⅲ区出土。

鉄鎌 30001は身が劍先形をした有茎の鉄鎌である。身は片造りで、高い鎬を有する面とその背面が平坦となる特徴を有する。

形態的には劍先形の先端から中央部が緩く削りこみ、関部分にひろがった身となる。現存長は、全長9.8cmで、身全長6cm・同中央部幅3cm・関部幅3.1cmをはかる。また茎全長は3.8cmである。なお重量は約25gをはかる。Ⅱ区出土。

4. 小結

第1次調査の各遺構についてこれまで述べてきた。時代別にこれらを区別するとⅠ期—弥生時代後期終末期、Ⅱ期—古墳時代後期（6世紀末～7世紀初め）、Ⅲ期—奈良・平安時代、Ⅳ期—鎌倉時代の4期に分けて考えることができる。これを箇条的に示すと、

Ⅰ期—丘陵最高部にひろがる土塁墓・石蓋土塼を主体とする弥生時代末期の墓地。

Ⅱ期—堅穴住居址・溝および製鐵か跡からなる古墳時代集落跡。

Ⅲ期—土塼墓・火葬墓（藏骨器）でなる奈良～平安時代墓地。

Ⅳ期—孤立柱建物群・欄列および溝からなる中世集落跡。

このような遺跡全体の概観については第6章でまとめて述べることとした。



(藤やす江画)

第4章 第2次調査

第4章 第2次調査の記録

1. 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 堀城文化財課長 柳田純孝（前任） 折尾学（現任）

堀城文化財課第1係長 飛高憲雄

調査庶務 堀城文化財課第1係 中山昭則 寺崎幸男

調査担当 宮井善朗 長家伸

発掘作業 鬼丸邦宏 朱雀義雄 平田信吉 井上清崇 田中博謙 清水文代 杉村文子 中
牟田サカエ 西納テル子 西島初子 能美八重子 吉岡アヤコ 吉岡貝代 吉岡
蓮枝 吉岡竹子

整理作業 林由紀子 外村陽子 金子尚美 升島裕子 太田次子 戸畠智恵子

2. 調査概要

2次調査地点は1次調査地点の北側に隣接しており対象面積は4240m²である。試掘調査の結果対象地の南北両側で遺構が確認されたため、南側調査区をI区、北側調査区をII区として調査を行う。調査面積はそれぞれ540m²と940m²である。なお遺構番号は全体で通し番号をつけた。

I区は丘陵の頂部を中心に調査をした。調査前には西洋風家屋が建築されており、中央部は削平が著しく遺構は西側の斜面部に若干残るのみであった。遺構面は花崗岩バイラン土で、標高22.30m～21.25mを測る。検出遺構は堅穴住居跡・土壙・溝・ピットである。遺物は堅穴住居跡をのぞいてはほとんど検出されず、時期の特定は困難であるが、遺構の覆土が住居跡と似ており住居跡と同様に、古墳時代後期と考えたい。南側検出の土壙は覆土に黄褐色ブロック・しまりのない灰色土を混じえ比較的新しい時期のものであると考えられる。

II区は丘陵頂部から西側斜面の裾付近までを調査対象とした。調査区内には伐採不可の樹木が多く存在する。検出面は花崗岩バイラン土で標高22.75～15.5mを測る。検出遺構は堅穴住居跡1棟、土壙7基、溝4条、ピットを検出した。堅穴住居跡は、I区同様古墳時代後期に属するものである。溝はいずれも幅40～60cm、深さ10cm弱を測る。出土遺物はなく時期・性格共に不明である。又、調査区南東隅で検出した土壙群はいずれも遺物の出土が見られないものの、形状や一部に石材の抜き跡がみられることから、弥生時代後半期にみられる石棺墓、土壙墓ではないかと考えられる。周辺からの聞き取りでは、この丘陵を削ったおり、多くの偏平な石材を持ち出したという話もある。又1次調査地点からは、同様の土壙墓から、彷彿内行花文鏡も出土している。本調査地点内では削平により基底面のみの検出にとどまるが、丘陵の尾根線上

には削平以前には弥生時代の墳墓群が遺存していたものと考えられる。II区もI区同様出土遺物は非常に少なく、古墳時代後期～古代に属する遺物が若干出土している。

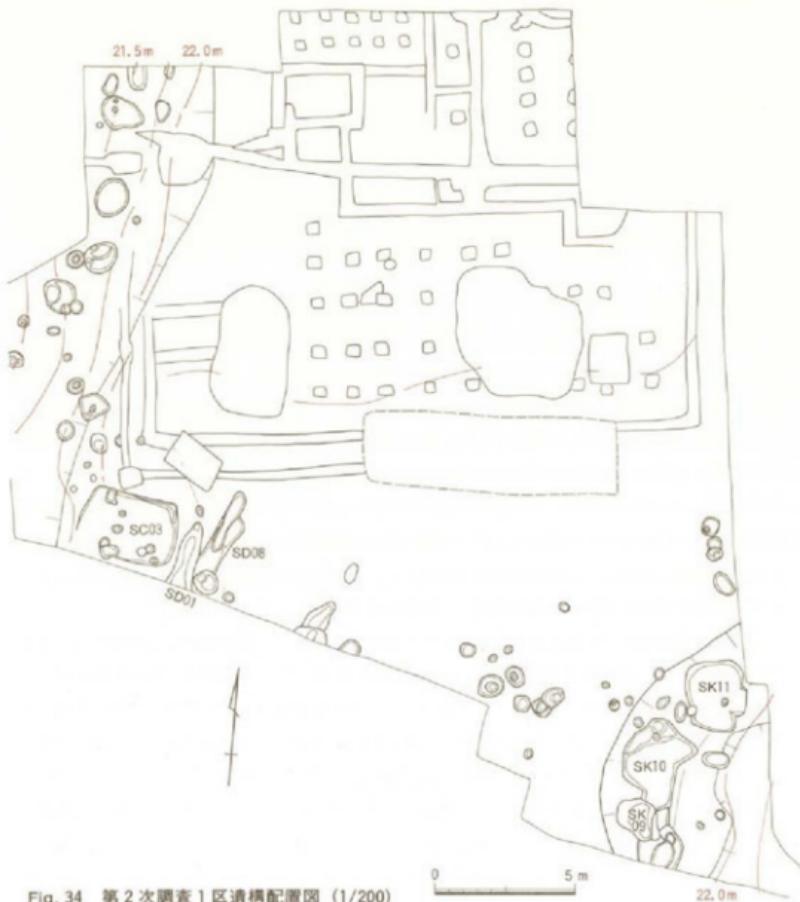


Fig. 34 第2次調査1区遺構配置図 (1/200)

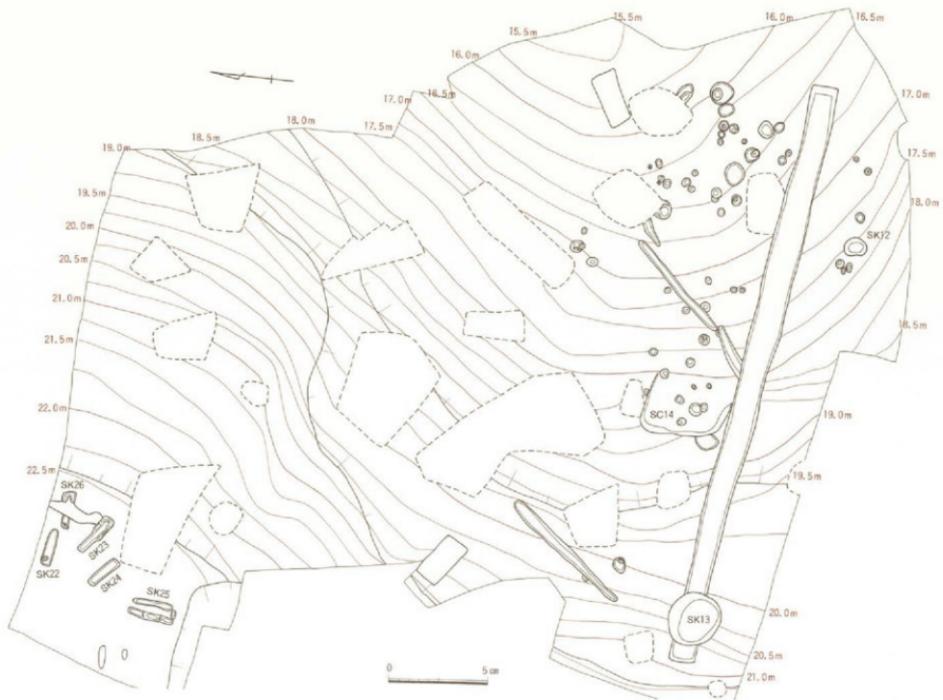


Fig. 35 第2次調査2区遺構配置図 (1/200)

3. 調査の記録

1) 穹穴住居跡

SC03住居跡 (Fig. 3, Pl. 27)

I区西側斜面で検出する。削平をうけ遺存度は悪く南西コーナーは欠失する。東西長3.4m、南北長2.3m、東壁高15cmを測る。平面形長方を呈す。北東コーナー北壁に幅15cm、深さ3cm程度の壁溝を検出、床面よりピットを2個検出するが主柱穴は確認できなかった。また中央東側に40×20cm程の花崗岩が床面より若干浮いた状態で出土した。作業台としての機能を持ったものであろうか。遺物は南東部を中心に破片として多く出土した。包含されていた土質によるものか、いずれも器面の磨耗が進み固化し得た物は少量であった。土師器壺・把手・須恵器蓋・環・高环が出土した。出土遺物より、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (Fig. 4)

1～6は土師器である。1・2は壺口縁部。頭部より鈍く屈曲し、口縁端部を丸く納める。内外面共に横ナデを施すが、調整は粗く指押えの痕跡を残す。器壁は厚手である。3は壺の体部上半～頸部。頭部の屈曲は緩く、口縁部は斜め上方に伸びる。内面は体部を縱方向に削り上げ、口縁部を横方向にナデしている。外面は横ナデを施すが、一部に板状工具によるナデの痕跡がみられる。4は壺上半部。屈曲部より口縁部はほぼ直立する。内面は縱方向の板ナデ及び指ナデ、外面は指ナデによる調整を施す。復元口径21.6cm、残存器高7cmを測る。色調淡赤褐色。

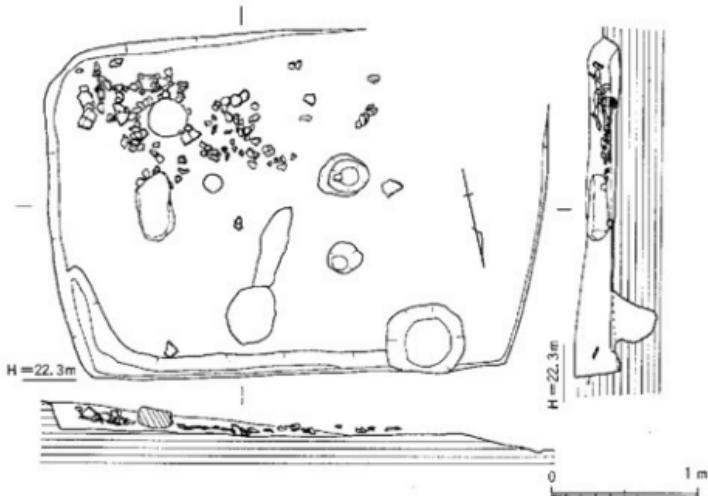


Fig. 36 SC03住居跡出土状況実測図 (1/40)

5は壺の上半部。内面は横方向のナデ、外面は下半が横方向、上半が縦方向の粗いナデを施す。調整は粗く指頭痕を残し全体に雑な印象を与える。復元口径20cm、残存器高9.2cmを測る。胎土には石英・長石微砂粒を多く混える。色調淡赤褐色を呈する。6は把手付き壺である。復元口径15cm残存器高15.5cmを測る。内面は体部を斜方向の削り、口縁部を横ナデ。外面は体部を縦方向のナデ、口縁部を横ナデにより調整する。体部は中程が膨らみ、頭部が鈍く屈曲し口縁部は外方に伸びる。把手は粘土塊を削り調整したものを壺体部に挿入するものである。色調淡赤褐色。1~6の土師器はいずれも器壁が厚く調整も粗雑である。

7は須恵器の高坏脚部破片である。坏部内底面は不整方向のナデ、脚部は横方向のナデ調整を施す。この他図示し得なかったが、須恵器の坏身破片も出土している。

SC14住居跡 (Fig. 5, PL. 27)

II区西側斜面の北端部で検出した。急な斜面上に掘削されており、西側部分は壁を検出できなかった。南北長4.0m、東西長2.7m、東壁高20cmを測る。床面は地形に沿って傾斜しており、東西で30cm比高差がある。掘削時には貼床面を構築していたものと思われるが、検出時には硬化面等は確認できなかった。床面よりピットを検出したが主柱穴と認定できるものはない。覆土より土師器・須恵器の小片が出土したが土師器についてはほとんど図示し得るものはなかった。SC03住居跡同様、古墳時代後期が考えられる。

出土遺物 (Fig. 5)

8~13は須恵器である。8・9は坏蓋である。8は復元口径14cm、残存器高2cmを測る。口縁端部は丸く納める。胎土は精良で、明青灰色を呈す。焼成は良好。9は復元口径13cm、残存器高3.5cmを測る。11唇部内面に段を有し、外面の体部屈曲部に痕跡的に沈線状の浅い段がつく。天井部1/3に回転ヘラ削りが施される。胎土には石英砂粒を混え、黒灰色を呈す。

10~13は蓋受け付き坏身である。10は復元口径10cmを測る。胎土に砂粒を混え、青灰色を呈す。蓋受けの立ち上がりは短く内傾する。11は復元口径10cmを測る。色調は器表面が青灰色~暗灰色、器肉は暗紫色を呈する。立ち上がりは内傾するが割合高く立ち上がる。口縁端部は丸く納める。12は復元口径10cmを測る。立ち上がりは短めである。外底面1/2程度に回転ヘラ削りを施し、内底面は回転ナデの後、不整方向のナデ調整を行う。色調は暗青灰色を呈す。13は復元口径14cmを測る。外底面は1/2程度に回転ヘラ削りを施す。色調青灰色。

14は土師器坏蓋である。復元口径11.8cmを測る。色調は赤褐色を呈し焼成はやや軟質である。体部屈曲部に沈線を巡らし、形態的には須恵器の蓋坏を模したものと言えるが、調整は横ナデによっており、沈線にも若干のぶれが認められ、ロクロによる成形・調整とは思われない。この種の土器はおもに、古墳時代後期を中心にして出土することが知られており、その意義付けが必要であろう。

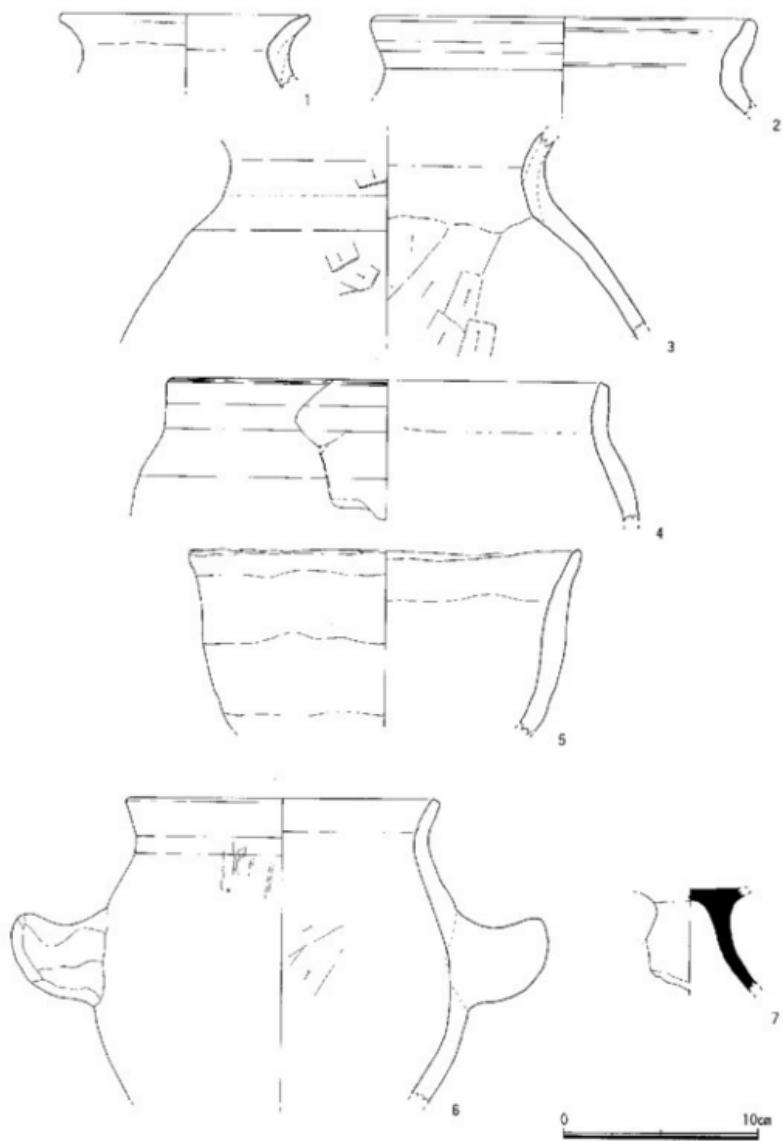


Fig. 37 SC03出土遺物実測図 (1/3)

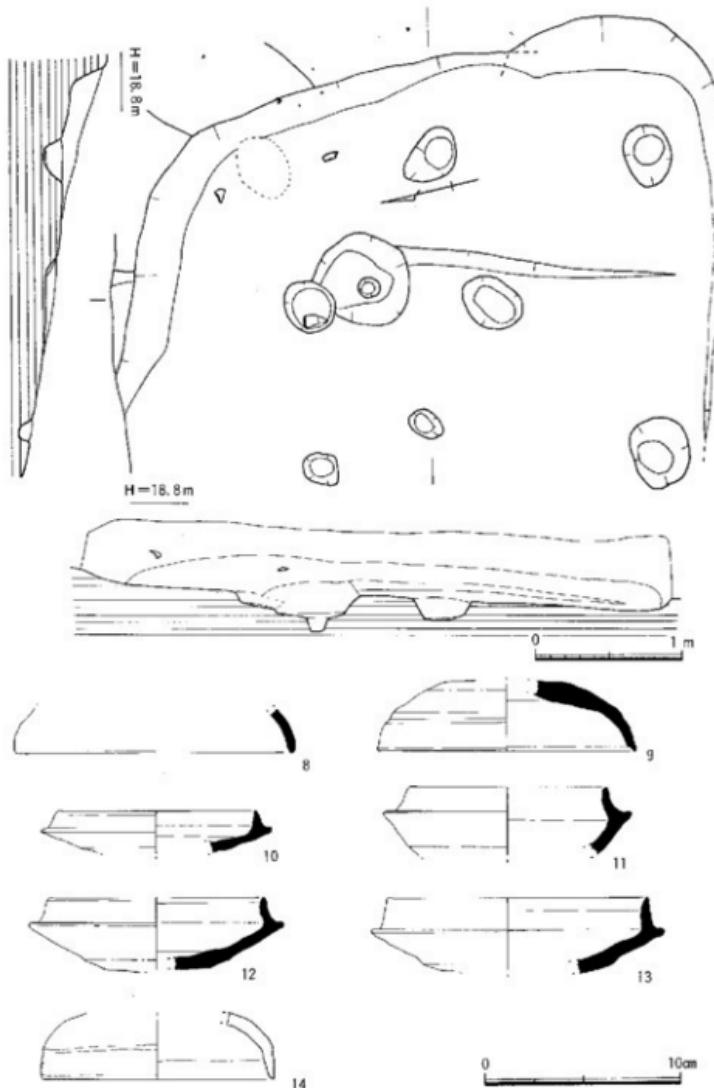


Fig. 38 SC14住居跡及び出土遺物実測図 (1/40-1/3)

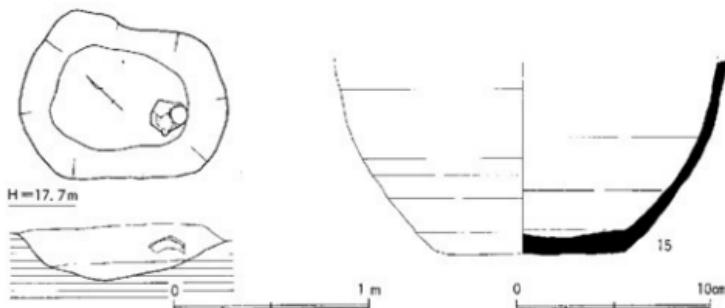


Fig. 39 SK12土壤及び出土遺物実測図 (1/30-1/3)

2) 土壙

SK12土壙 (Fig. 6、PL. 28)

II区北西端で検出した。東西長1.05m、南北長0.85m、深さ30cmを測る。断面船底状を呈す。中位程より須恵器壺の下半部が出土している。

出土遺物 (Fig. 6)

15は須恵器壺の下半部である。体外面は回転ナデ、底部はヘラ切りによる。内面は回転ナデの後縦方向にナデで仕上げる。灰白色を呈する。

SK13土壙

1.3m×1.2mの略円形を呈する。深さは80cm程で底面は緩くくぼむ。遺物は細片のみで時期は不明である。

SK22土壙 (Fig. 7、PL. 28)

SK22～SK26は概要でも述べたように土壙墓群の可能性が強い。SK22は東西長1.8m、南北長50cm、深さ10cmを測る。出土遺物無し。

SK23土壙 (Fig. 7、PL. 28)

東西長2.2m、南北長70cm、深さ15cmを測る。西半部は石材の抜き跡が三方に巡り、一部板石が残存している。東半部は石材の抜き跡等は見られず、2基の土壙の切り合とも考えられる。出土遺物無し。

SK24土壙 (Fig. 7、PL. 29)

東西長1.8m、南北長0.4m、深さ30cmを測る。平面は長方形で、底面は平坦で他の掘り込みは見られない。出土遺物無し。

SK25土壙 (Fig. 7、PL. 29)

削平を受け、三方の石材抜き跡のみが残る。内々で南北長1.8m、東西長0.4mを測る。一部

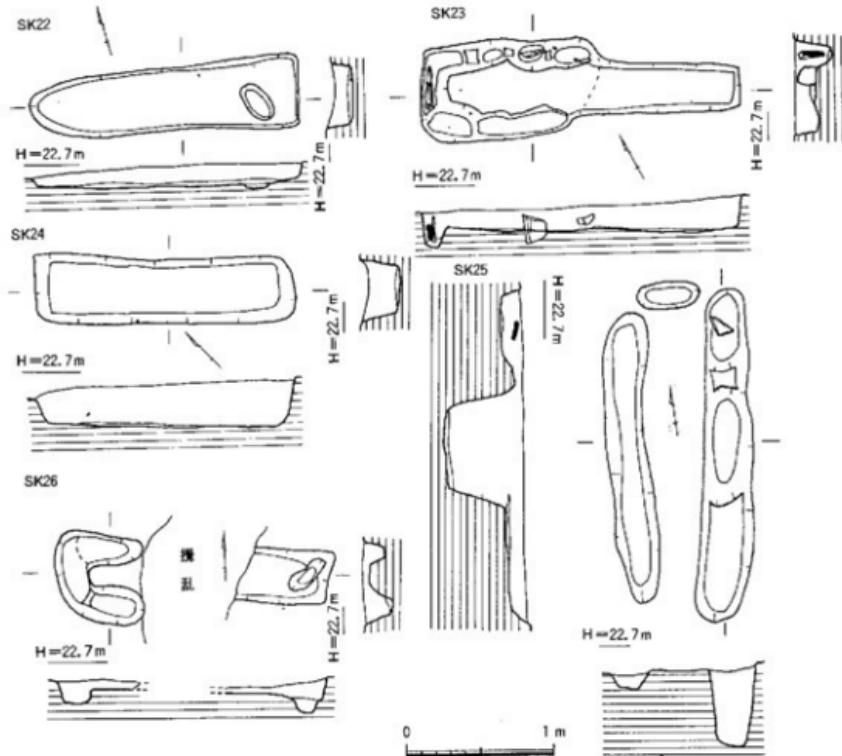


Fig. 40 SK22・23・24・25・26 土壌出土状況実測図 (1/40)

粘板岩質の板石が残る。他の土壤と軸を異にする。出土遺物無し。

SK26土壤 (Fig. 7, PL. 29)

中央部に削平を受ける。東西長1.8m、南北長0.4m、深さ10cmを測る。西辺部に板材抜き跡が残る。出土遺物無し。

4. 小 結

2次調査地点は丘陵頂部が削平を受け、遺構は西側斜面を中心につかに残るのみであったが、古墳時代後期の住居跡や、弥生時代の土壤墓・石棺墓と思われる土壤群の存在など、遺構群の性格を考える上で重要な資料を提供している。周辺の調査結果とも考え合わせていく事が重要であろう。

第5章 第3次調査

第5章 第3次調査の記録

はじめに

本調査地点は熊添池の西岸にあり、第1次調査地点の北側に当たる。この一帯に試掘トレンチを入れ、遺跡の分布範囲を探査した結果、第1次調査地点の北側隣接地を中心として約800m²に遺跡の広がりが推定できた。なお、さらに北側になると上部の削平が激しく、遺構の遺存は認められなかった。今回の調査対象となったのはこうした試掘調査の成果によって焼土層と遺物包含層の分布していることが確かめられていた範囲であった。

なお、調査地点の西側25mの位置にある納骨堂は周囲より約1mほど高まり、径約20mの円丘状をなしている(Fig. 4)。福岡市文化財分布地図(福岡市教育委員会1979)によるとこの位置が干隈古墳群E群の古墳として登録されている。ただし、この部分はかつて共同墓地であり、また近年の納骨堂建設によって相当の破壊を被っている。今回の工事ではこの部分は保存地区となっており、調査は行わなかったが、旧地形の残されている東側斜面については現況の平板測量を行い、併せて周辺を表面探査した。しかし石室石材の可能性のある花崗岩角礫を数個確認したのみであった。

調査対象地の現状は雜木林であり、公園利用のために樹木を切り倒さないことを前提としての調査であったために、調査区域はかなり変則的なものとなった。調査対象地は全て斜面であり、調査前の標高は18~22mの範囲であった。なお、今次調査の時点では第1、2次調査地点の範囲については既に公園が完成していた。

1. 調査の組織

発掘調査は1991年8月2日~1991年9月20日に実施した。調査に際しては以下の体制を組織したが、相次ぐ緊急調査により十分なる体制がとれなかつたが、関係各位の多大な協力によりその進行が無事進められたことを明示しておきたい。

(調査、報告関係者のみ)

調査庶務：中山昭則

調査担当：吉留秀敏

調査補助：尾山洋

整理補助：井英明

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂環

調査、整理協力：亀井明徳(専修大学文学部)

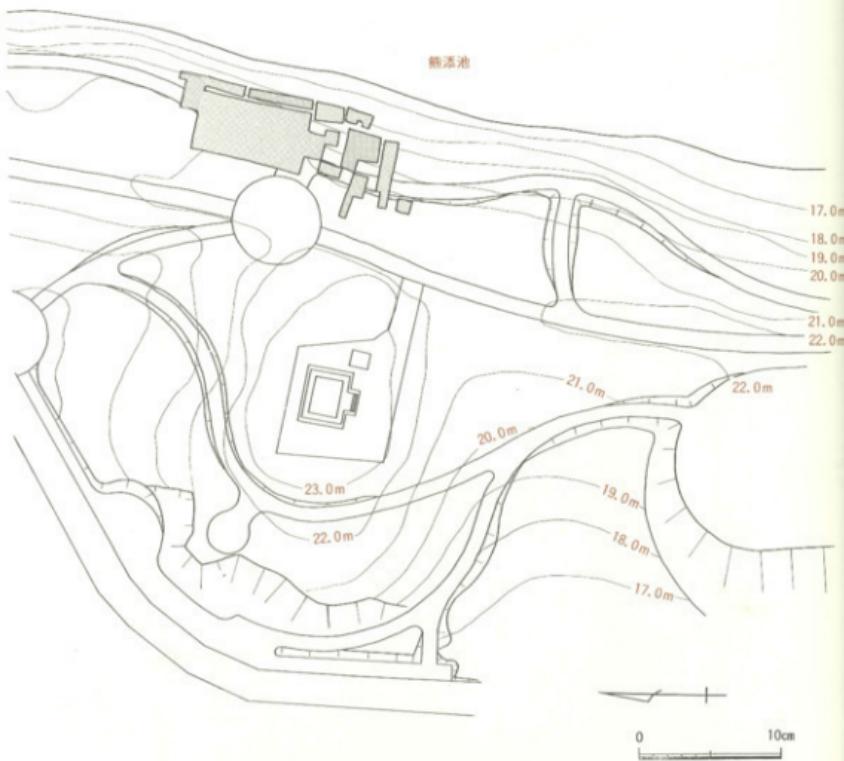


Fig. 41 第3次調査周辺地形図 (1/500)

2. 調査の概要 (Fig. 42)

予定された調査範囲の中で北半部分は樹木がなかったために小型の重機を用い表土の除去を実施した。南半部分は樹木の合間を縫い、手作業での調査となった。南半部分は計6カ所をグリット状に調査した。最初に調査を行った北半部分をA区、南半部分斜面上部の北からB、C、D、E区、斜面下部の北からF、G区とした。斜面上部の標高20~22mの範囲では、表土を除去するとすぐに基盤の花崗岩バイラン土が現れた。このことは丘陵の上部が相当の削平を受けていることを示している。斜面では人工的に造成された平坦面が数カ所検出された。これは第

1次調査地点の造成面と同様のあり方をしていた。A区で検出した最大規模の平坦面を「テラス1」と呼ぶ。またA区南端からB区の平坦面を「テラス2」、C-D区の平坦面を「テラス3」、A区南東端からF、G区で検出した平坦面を「テラス4」と呼ぶ。

3. 調査の記録

(1)地層の観察 (Fig. 44)

本調査地点での地層は斜面上部では削平のために本来の土壤部分を失っている。基盤層は花崗岩のバイラン土である。斜面中位から下位では主にテラス部分への流入土として最大厚0.7mの二次的な埋土がみられた。

図では調査地点の3カ所の土層断面を示した。

(2)各区の様相 (Fig. 43)

A区

A区では斜面の上部に焼土壙1基を検出した。これは上部を削平され、中央部を試掘溝により分断された状態での検出であった。斜面の中段から下方に階段状の造成面があり、テラス1が造られている。テラスの規模は南北約20m、東西約3mである。法面の落差は最大1.5mであり、傾斜は約30度を測る。また、法面の中央付近には幅2m前後、奥行き1~2mの小さな平坦面があるが、性格は不明である。平坦面では柱穴74個、土壙2基を検出した。柱穴は多くが円形を基調とし、柱痕を残すものもあった。また柱穴には柱筋が通るものもあったが、建物を復元するにはいたらなかった。

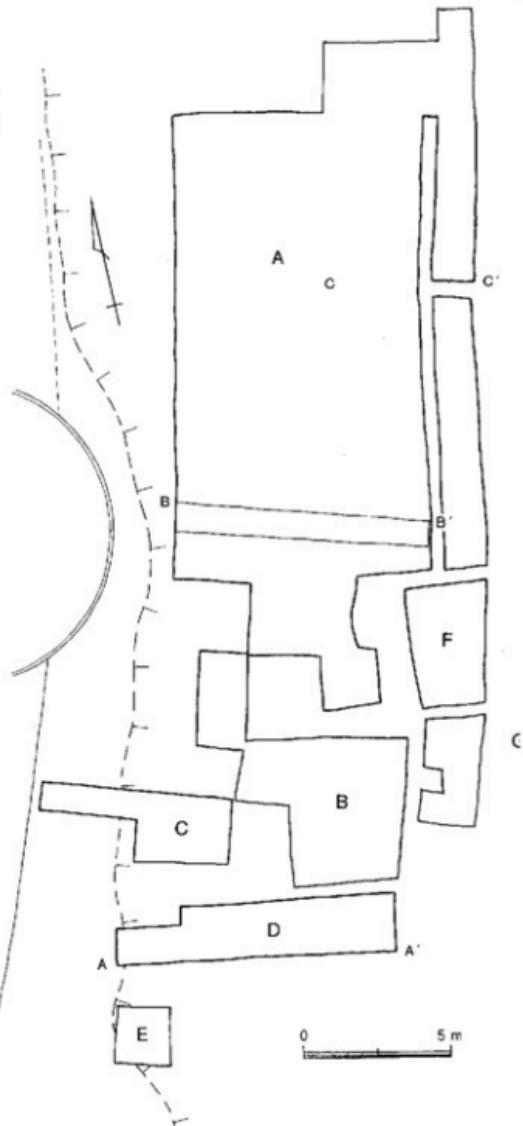


Fig. 42 第3次調査グリッド配置図 (1/200)

B区

B区はA区の南側に設けた。斜面上位は擾乱が多く、中位の標高約20.3m付近に段落ちがあり、テラス2が設けられている。テラス床面には柱穴などの遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかった。テラスの段落ち部分と調査区南東隅部に長方形の土壙2基が検出された。遺物などの出土はなく、性格は不明である。

C区

最も西側に設定した調査区である。調査の結果、東側の標高21.5m付近に段落ちがあり、テラス3を設けている。またこの段落ちの上位に蔵骨器SK03が検出された。

D区

D区は斜面に直交して約10mの長さで設けた。斜面上方でC区では確認したテラス3の延長部を検出した。テラス床面では柱穴、土壙などが検出されたが、遺物は少なく、土師器、須恵器が少量出土しただけである。

E区

C、D区で検出したテラス3の広がりを知る目的で、最南部に一辺約2mの調査区を設けた。調査区の南半分は最近のゴミ穴であり、破壊されていた。北側でテラス3の延長と見られる平坦部を検出した。

F、G区

A区の南側でB区の東側に設定した。ほぼ全面がテラス4に含まれる。テラスの法面は傾斜が急であり、約0.8mの落差がある。平坦面には柱穴などの遺構は認められなかったが、土壙1基が調査区東壁にかかるて検出された。テラス4はさらに熊添池側に広がっている。

4. 検出遺構と遺物

SK03蔵骨器 (Fig. 45)

C区中央付近で検出した。上部は近年の造成などにより破壊されている。掘り方は不明確であったが、基盤層直上で確認できた。北側が不明であるが、平面形は一辺約50cmの方形を呈し、確認面からの深さは約15cmである。墓壇の主軸はN-06°-Eをとる。埋土は蔵骨器の下位に2層を区分した。下層は基盤層上部の粘質土に類似する。上層には多量の炭化物を含み、黒色化している。この埋土の上に土師器皿坏面を上にして置き、土師器甕で覆っている。甕内には焼化した人骨片が認められた。

出土遺物 (Fig. 46)

土師器小型甕と坏のセットである。1の皿は口径14.0-14.3cmとやや大形で、内底の周縁をおさえて溝状にし、体部は外反気味につくる。一部を除いて器面が剥離しているが、体部内外はヨコナデ、内底中央はナデ調整で凸状になっている。外底は凹凸がおく調整がよくわから

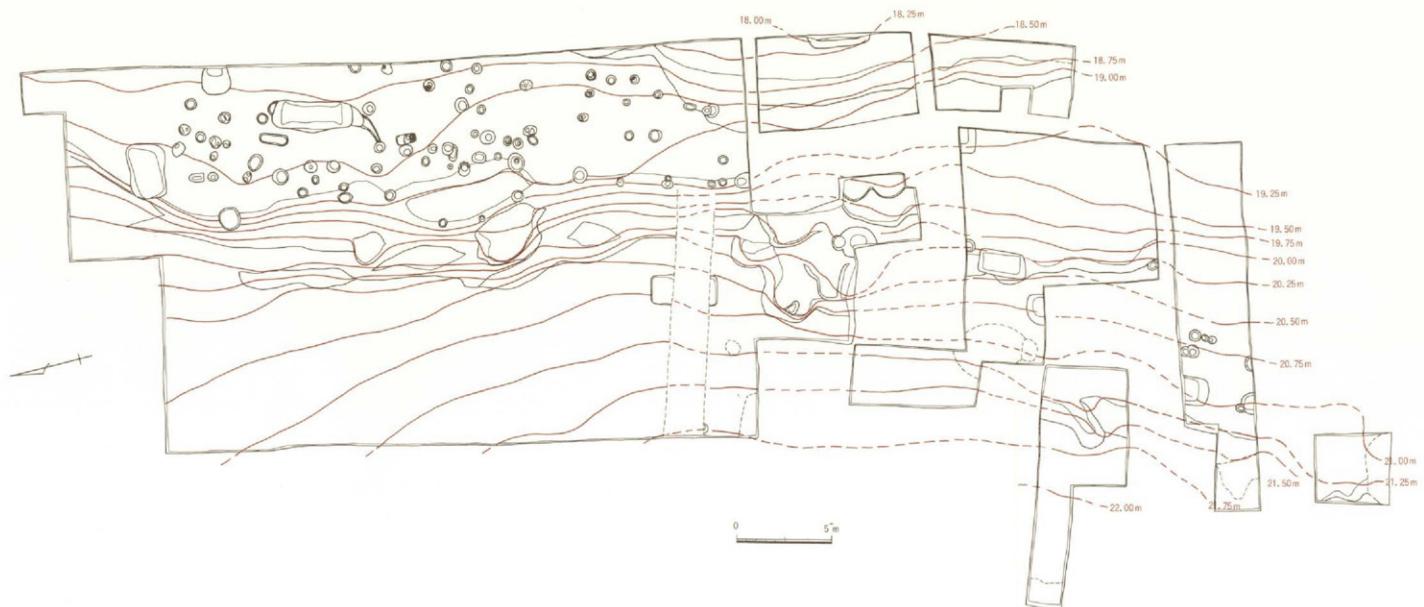
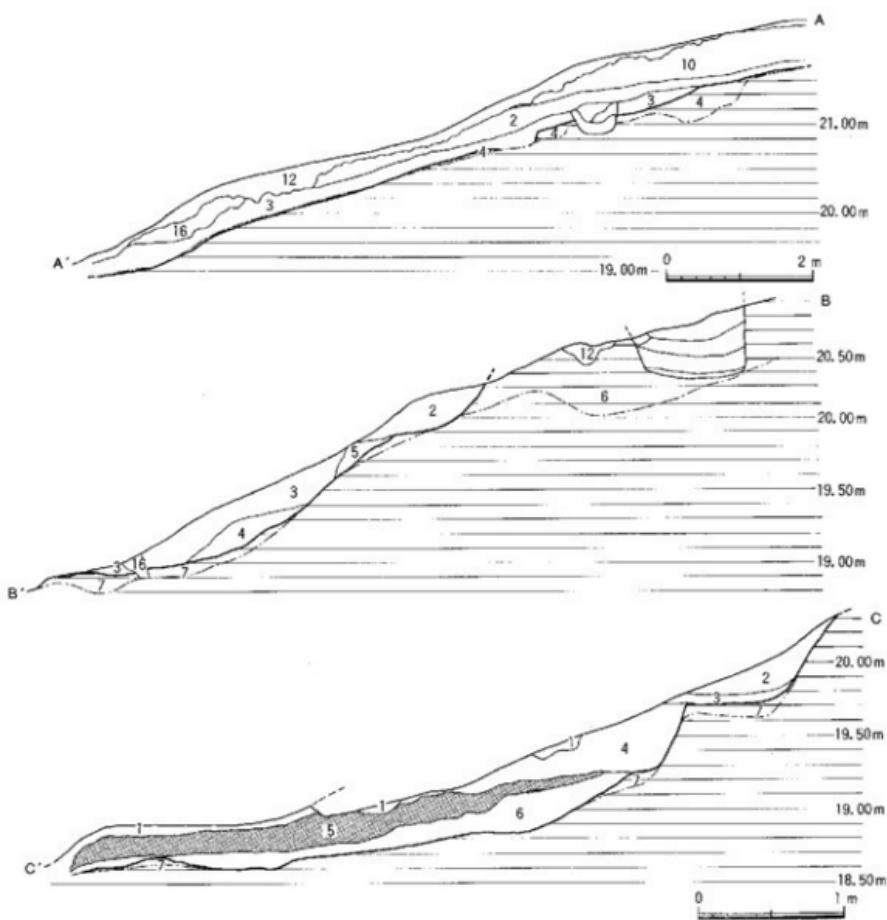


Fig. 43 第3次調査遺構全体図 (1/100) (折込み)



式別トレンチ実際土層剖面図(ハーネス基盤土層付)

1・黄褐色堅硬泥炭土(薄灰岩)

2・黄褐色堅硬泥炭土(薄灰岩)

3・赤褐色バクテリカル泥炭土(薄灰岩下に付するもの)

3・赤褐色粘土質、瓦礫粘土質の鉄鉱化物を含む、全体的に青

褐色(しまる)→付する鉄鉱化

3・褐褐色堅硬土、少粒に上りてある、若頭部から下段砂多量に含み炭化物、鉄物(瓦灰岩、大無層帶)を含む

4・赤褐色(灰)→粘土質の瓦礫、瓦礫の火成岩

4・赤褐色(灰)→粘土質の瓦礫、瓦礫の火成岩

5・赤褐色(灰)→粘土質の瓦礫、瓦礫の火成岩

5・赤褐色(灰)→粘土質の瓦礫、瓦礫の火成岩

6・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

7・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

8・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

9・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

10・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

11・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

12・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

13・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

14・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

15・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

16・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

17・赤褐色粘土質、瓦礫の火成岩

4・赤褐色粘土質上、少粒質、板上、炭化物(シザック状)を含む
礁(木の木の木に礁)

5・赤褐色粘土質(木の木に礁)

6・赤褐色(灰)→粘土質

7・赤褐色粘土質(山川)

8・レントゲン強度測定図(1-1)・C・断面土層付

1・現水土、有機多量(木の木)、下には褐色粘土質

2・4-6cm上、砂粒多量(木の木)、灰質土。B-A実寸付(木の木の木)

3・赤褐色粘土質(木の木)

4・褐色粘土質、瓦礫多量(木の木)、木の木

5・褐色粘土質、瓦礫多量(木の木)、木の木

6・褐色粘土質、瓦礫多量(木の木)、木の木

7・褐色粘土質(木の木)、木の木

8・褐色粘土質(木の木)、木の木

9・褐色粘土質(木の木)、木の木

10・褐色粘土質(木の木)、木の木

11・褐色粘土質(木の木)、木の木

12・褐色粘土質(木の木)、木の木

13・褐色粘土質(木の木)、木の木

14・褐色粘土質(木の木)、木の木

15・褐色粘土質(木の木)、木の木

16・褐色粘土質(木の木)、木の木

17・褐色粘土質(木の木)、木の木

Fig. 44 第3次調査土層断面図 (1/80)

ないが、蓆状圧痕らしきものが認められる。2の窓は胴部中位以下を欠損しているが、口縁付近はよく残る。胴部外面と、く字状口縁はあらくハケ目調整され、内面は斜め方向にケズリ調整されている。口径17.6cmを測る。

SK01土壙墓 (Fig. 47)

A区のテラス1北寄りで検出した。主軸はN-14°-Eであり、墓壙の規模は南北約2.0m、東西約0.8m、深さ約0.5mを測る。また墓壙下場は南北約1.6m、東西約0.4mを測る。墓壙内の西小口側が広がり、僅かに下がっていることからみると、木棺であった可能性が高い。しかしの場合棺の内法は相当小さいものとなる。埋土中からの遺物の出土はなかった。

SK02土壙墓 (Fig. 47)

A区のテラス1北端で検出した。土壙の北壁から西壁面はテラスの法面に接している。主軸

はN-80°-Eであり、墓壙は二段掘りであった。墓壙の規模は東西約1.6m、南北約1.0mであり、深さは最大0.8mを測る。床面は東西約1.4m、南北約0.6mを測る。床面の中央主軸に沿って、長さ約1.0m、幅約0.3m、深さ約0.1mの掘り方がある。墓壙内の西小口側床面付近に4点の供獻土器が出上した。このうち3点は墓壙隅部に接して置かれ、1点は二段目の掘り方内に出土した。

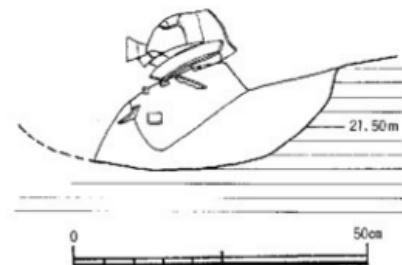
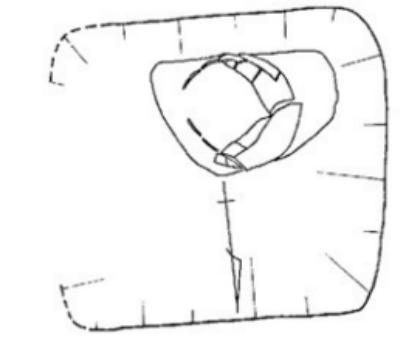


Fig. 45 SK03土壙出土状況実測図 (1/10)

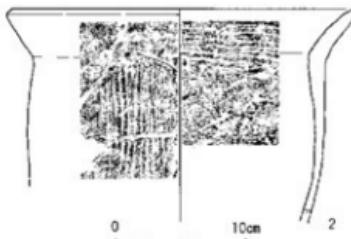
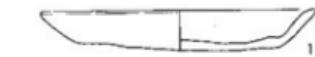


Fig. 46 SK03土壙出土遺物実測図 (1/3)

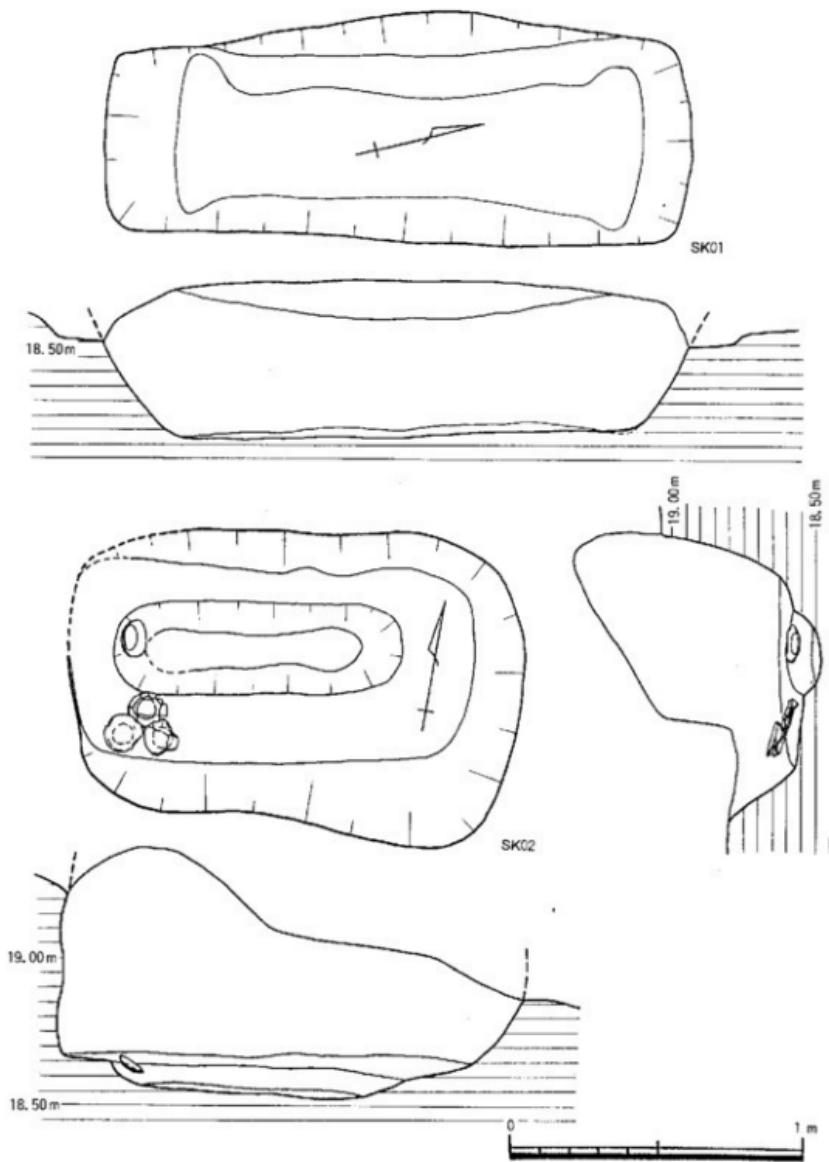


Fig. 47 SK01・02土壤出土状況実測図 (1/20)

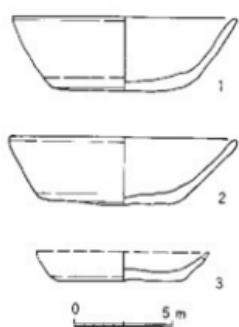


Fig. 48 SK02土壙出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 48)

土師器坏、皿をセットで検出した。坏の1、2はほぼ同形、同大であり、口径11.5cm、器高3.8cmと3.5cmを測る。ともに赤褐色を呈し、器面が摩滅して調整はわからないが、削りは認められない。内外底ともに凹凸が多く、2の外底中央にヘソ状の突起がみられる。3は口径6cmほどの小皿であるが口縁を欠損し、器面が摩滅しており、外底中央には2と同様のヘソ状突起がある。太宰府史跡SK678出土土師器の特徴を持ち、9世紀代の時期と推定する。

SK04焼土壙 (Fig. 49)

A区の斜面上部に検出した。上部を削平され、中央部に試掘溝が設けられたために保存状態は良くない。主軸はほぼ南北方向であり、N-11°-Eを測る。平面形は長方形であり、規模は長さ約1.9m、東西約0.8m、深さ約0.5mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、焼土化が3~5cmに及んでいる。土壤内埋土は4層に区分され、下部に炭化物が10~15cmの厚さで堆積していた。埋土中からは須恵器や土師器の小片と共に鉄滓が少量出土した。

5. その他の出土遺物 (Fig. 50)

テラスの上面からは少量の遺物が出土した。その中でもテラス1には床面上に20~50cmの厚さの包含層が形成され、比較的多くの遺物が出土した。出土した遺物には須恵器、土師器、鉄滓などがある。また、より古い時期の混入遺物として黒耀石製の剝片が少量出土した。

1はテラス1床面から出土した須恵器坏身の完形品で、ケズリ調整された底部にヘラ刻線がみられる。口径9.5~10.0cmを測る。2はテラス1上の包含層から出土した須恵器坏蓋であり、宝珠紐で、かえりをもつ器形。黒灰色で一部は赤変している。3は須恵器坏身の高台付近の破片で、高台を短く直立させる特徴をもち、外底には窯印が刻まれており、内外ともに暗赤褐色、胎土中に石英粒がかなりおおい。テラス1柱穴内出土である。4はテラス1出土の須恵器高坏で、口径7.8cm、高さ6.9cmの小型品。脚端部の内外を溝状にへこましている。灰色、部分的には黒く、よく焼きしまっている。5は大形の坏蓋の破片であるが、口縁部は僅かに残り、口径約20cm程度、甲部はケズリ調整、折り返す口縁の内外はヨコナデ、内側はナデにそれぞれ調整されている。茶褐色に焼成されている。テラス1包含層出土。6は土師器壳の小片で、石英粒を含む胎土、赤褐色ないし黄褐色を呈する。口縁はヨコナデ、胴内面は乱雑なケズリ調整であ

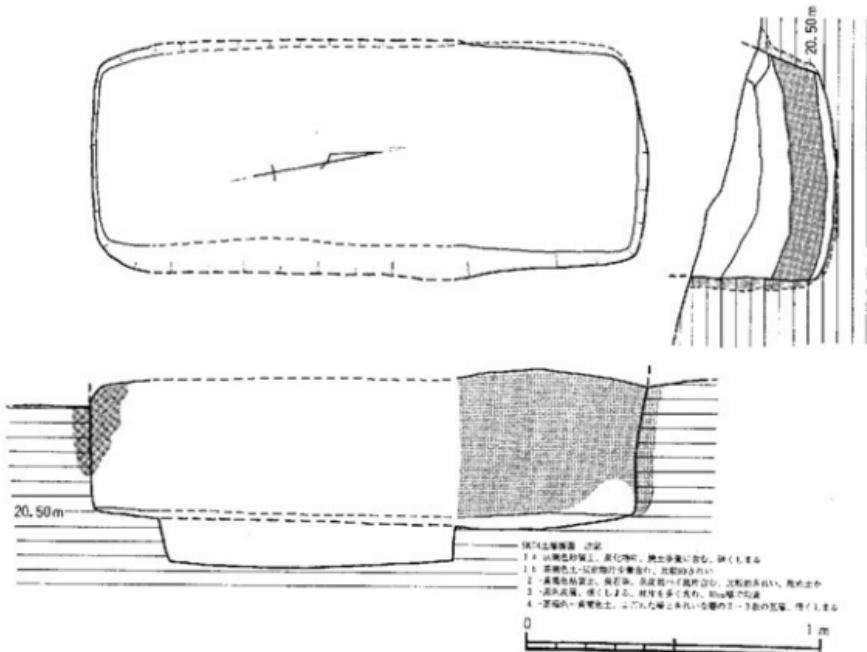


Fig. 49 SK04 土壌出土状況実測図 (1/20)

る。7, 8は同一個体の須恵器臺である。口径18.8cmで内外ともに灰色を呈し、硬質に焼き結まる。口造りはシャープであり、外面に正格子文のタタキ、内面は同心円文の受具痕が明瞭にみられ、丸底外面はナデ調整されている。テラス1の北側を中心におおくの破片が包含層から出土した。9は砂岩製の砥石である。

6. 小 結

干隈3次地点では丘陵の斜面を階段状に造成された遺構が検出された。造成された平坦面には柱穴や埋葬遺構が検出された。こうした平坦面は本調査でテラス1としたものを北限とし、1次調査地点との間に数カ所設けられているようである。またテラス4の広がりから、斜面下方の熊添池水面下にも分布している可能性が高い。

出土した遺物は最も多く出土したテラス1を見ると、平坦面の直上や包含層からは上師器、須恵器、鉄滓などが多く出土した。出土した須恵器が陶邑によるTK217からMT21によよんでいる。時期幅は7世紀前葉から8世紀前葉までの約100年となろうか。また、平坦面に設けられた埋葬遺構から出土した土師器は9世紀代に位置付けられる。

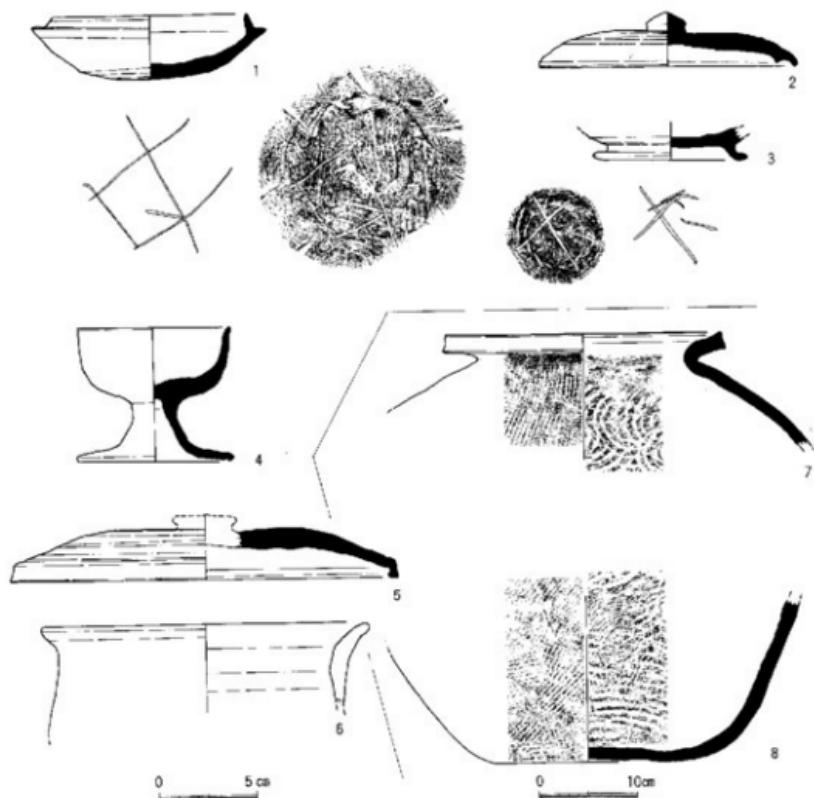


Fig. 50 表土・表面採集遺物実測図 (1/3-1/4)

以上の点から本調査地点のテラスは、おそらく鉄生産等に関わる工房と居住域として7世紀前葉に設けられ、それは8世紀前葉まで継続したと見られる。その後、生活は中断し、9世紀代になってこの平坦面が埋葬用の墓地として再利用されたものと考えられる。

埋葬構造は藏骨器、木棺墓、土壙墓と多様であり、特に藏骨器は類例の少ないものである。被葬者層の性格などについては、今後の類例や、周辺遺跡の調査の進行をまって検討したいと思う。

なお、本次調査における出土遺物の検討、作図、解説については亀井明徳先生にお願いした。ここに記して感謝したい。

第6章 おわりに

千歳中央公園建設にともなう飯倉G遺跡の第1～3次調査についてこれまで各次の成果を述べてきた。

さて今回調査の成果については第1次調査で述べたように、時期ごとに検出した各遺構を整理すると大きく4時期に区別することができる。

第Ⅰ期—弥生時代後期終末を中心とする土壙墓・石棺墓・石蓋土壙墓で構成される墓地である。

丘陵のほぼ中央部を占める南北100m、東西20m程度の狭長な範囲に限られる墓地であろう。墓地中央部は、第2次調査では遺構が出土していないが、地元での聞き取りによれば昭和初期に粘土採掘を同所でおこなった際、多くの扁平石材が出土したことが知られており、墓地の中心部であった可能性が高い。また第1次調査SK02土壙より出土した小形彷彿鏡は福岡県を主として多数出土しているが、周辺地域では早良区藤崎遺跡、西区飯氏馬場遺跡、南区弥永原遺跡などで類品が知られる。

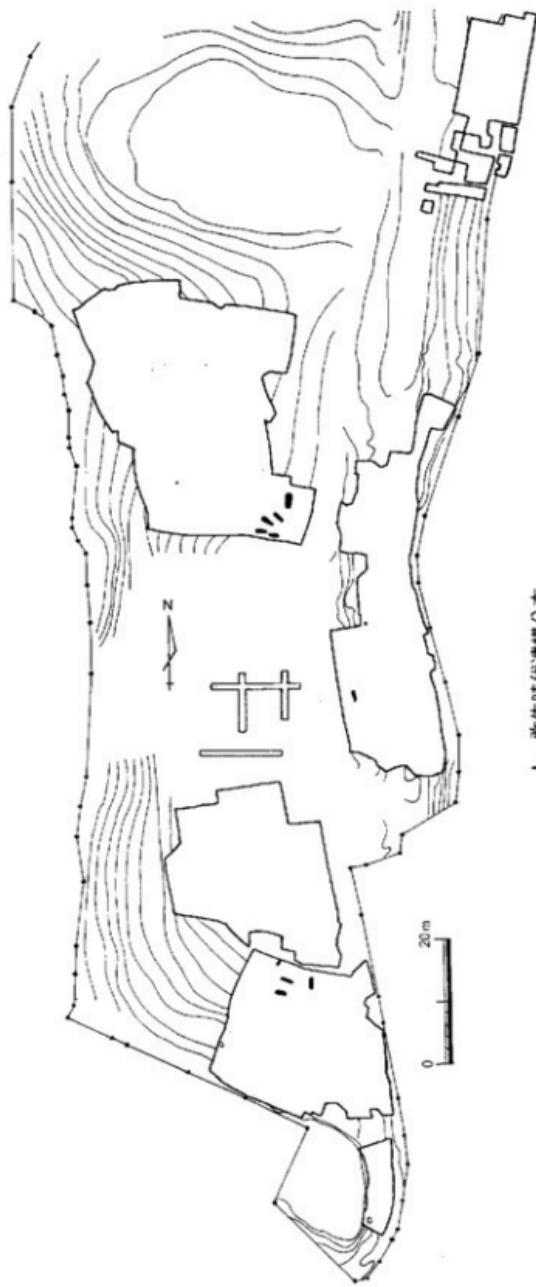
第Ⅱ期—古墳時代後期の堅穴住居跡・溝・製鉄炉などで構成される集落跡である。各遺構に伴う上器は須恵器A期（7世紀初頭頃）を中心とする。同時期の分布は丘陵頂上部付近にとどまらず、南・東・西側斜面にひろがっており、南北140m、東西50m以上の範囲にひろがっている。また単なる住居としての集落にとどまらず製鉄炉をともない、道路などとの関連遺構も注目される。

第Ⅲ期—第1次調査Ⅲ区のSK17土壙や第3次調査時検出のSK02土壙にみるように時期的に奈良時代～平安時代の墓地である。当該期は表採遺物などでも少なく、生活遺構の密度は薄い時期ではないかと考えられる。

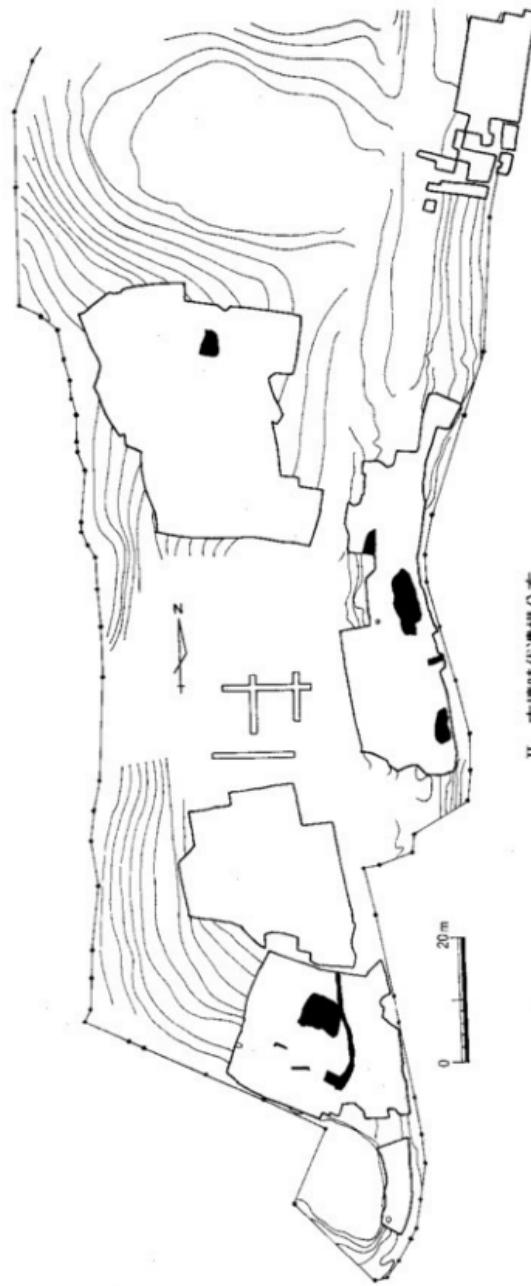
第Ⅳ期—第1次調査Ⅱ区を主として当該期の遺構群が相当する。平行して走る2条の南北溝の内側（西側）整地面に梁・桁行が2×3間規模の建物、柵列などを配置する。SD02溝内出土白磁碗片から鎌倉時代（13世紀）の集落と考えることができる。

おわりに千歳中央公園建設にともなう調査に際しては数多くの関係者の諸々の協力があり、ようやくなしとげられたものと考えています。つきましては、この公園が本当に市民の方々の憩いの場として活用されることを願ってやみません。

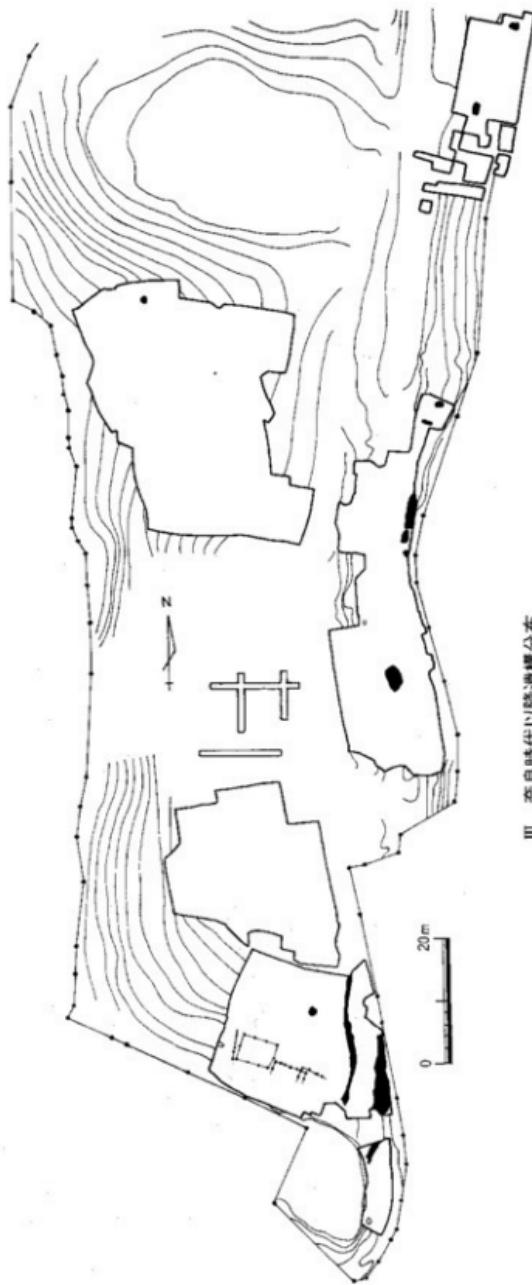
I. 新生時代遺構分布



II. 古墳時代遺構分布



III. 奈良時代以降遺構分布



福岡県小形彷製鏡出土地名表

(1993年作成)

番号	市町村名	所 在 地	出土遺構	鏡式	備 考
1	前原市	大字三雲字塚裏り	古墳周構内	内行花文	
2	々	大字三雲字八反田	中世構内	々	
3	福岡市	西区大字飯氏字馬場	箱式石棺	々	
4	々	南区弥永原	豎穴住居跡	々	
5	春日市	岡本町		々	単独
6	々	々		々	々
7	大野城市	大字瓦田字原門	土壙墓	不明	
8	筑紫野市	大字武藏字八隈	古墳墓路外側	内行花文	
9	柏原郡	柏原町酒殿	箱式石棺墓	々	
10	朝倉郡	夜須町大字三並字八並	々	々	
11	々	朝倉町山田後山	々	々	
12	甘木市	菩提寺瓢箪山	々	々	
13	小郡市	一沢字横隈山	住居跡	々	
14	々	横隈字狐塚	土壙墓	重圓文	
15	久留米市	相川町西屋敷	箱式石棺墓	内行花文	
16	浮羽郡	吉井町富合永西屋形法華	散布地	々	
17		原々 千代久鳥越	々	々	
18		宮田塚堂古墳	封土内	不明	
19		々々	々	々	
20		田主丸町石垣	散布地	内行花文	
21		々 大井	箱式石棺墓	々	
22	八女市	龜甲	々	々	
23		々	木棺墓	柳葉文	
24	山門郡	瀬高町小川	墓地	内行花文	
25	嘉穂郡	嘉穂町下益字向左益		々	
26	鞍手郡	若宮町宮水	採集	々	
27		々 汗井掛	木棺墓	々	
28	遠賀郡	岡垣町山田字大坪	溝	々	
29	北九州市	若松区岩屋	散布地	重圓文	
30		八幡西区馬場山	祭祀遺構	内行花文	
31		々	々	々	
32	田川市	位登	箱式石棺墓	々	

33	田川郡	香原町採銅所宮原	箱式石棺墓	内行花文	
34	行橋市	大字前田山並検地	石蓋土壙墓	タ	
35	京都郡	厚川町本庄	箱式石棺墓	タ	
36		タ 山鹿宇石ヶ坪	石蓋土壙墓	タ	
37		タ 繩命院	箱式石棺墓	タ	
38		タ 城井	タ	タ	北九州市立考古博物館 『弥生古墳を覗る』1991 浜石哲也『福岡考古』15
39	朝倉郡	朝倉町大庭久保	木棺墓	タ	
40	筑紫野市	藏城	住居跡	不明	
41	北九州市	小倉南区山崎	石蓋土壙墓	不明	
42		タ 上清水	包含層	内行花文	
43		タ 金山	水路跡	タ	
44		タ 高津尾	箱式石棺墓	タ	
45		タ タ	土壙墓	タ	
46	福岡市	早良区藤崎	擾乱塚	タ	
47	春日市	日ノ出町六丁目(須玖永)	包含層	タ	鉄型
48		周本一丁目(須玖坂本)	溝	タ	タ
49	朝倉郡	夜須町大字三牟田(ヒルハタ)	住居跡	タ	タ

図 版

PLATES



1 第1次調査II区調査前全景（東から）



2 第1次調査I・II区調査前全景（南東から）



1 第II区調査区全景（東から）



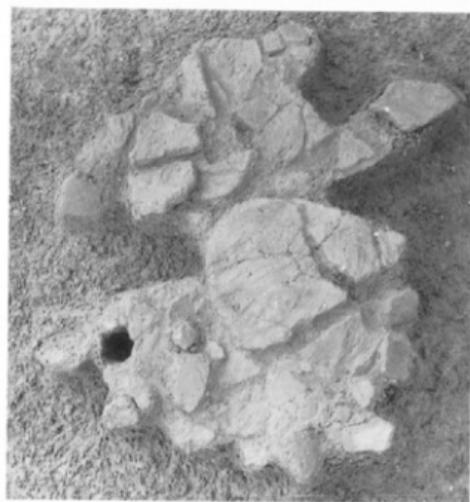
2 SD01・02溝出土状況（西から）



1 SC01住居跡検出状況（南西から）



2 SC01住居跡床面須恵器破
出土状態



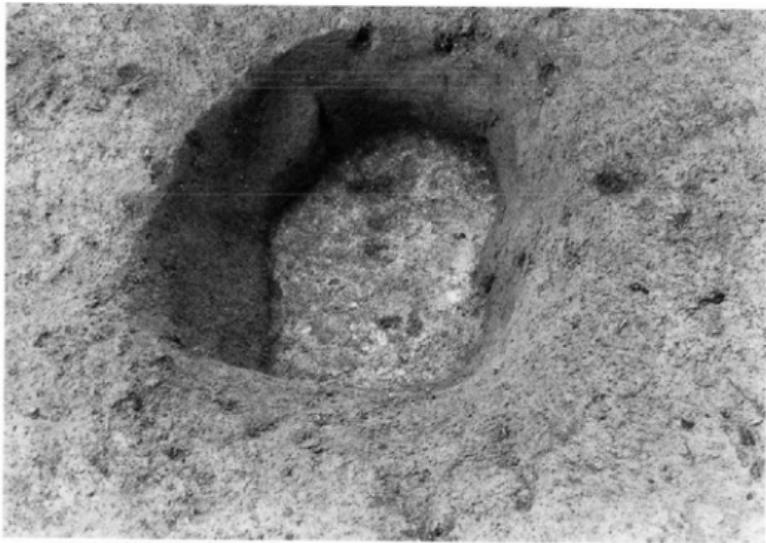
3 SC01住居跡床面土師器甕出土状態



1 SA01樁及びSB01掘立柱建物検出状況（東から）



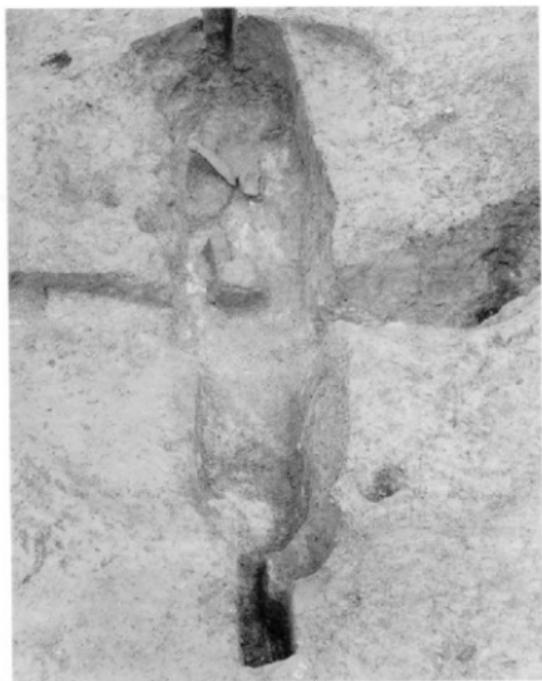
2 SD01・02溝検出状況（北から）



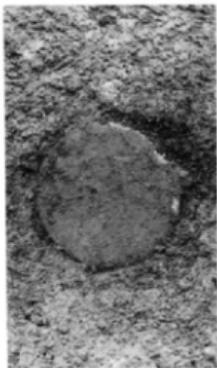
1 SK03土壤検出状況（西から）



2 SD01溝土層断面（南から）



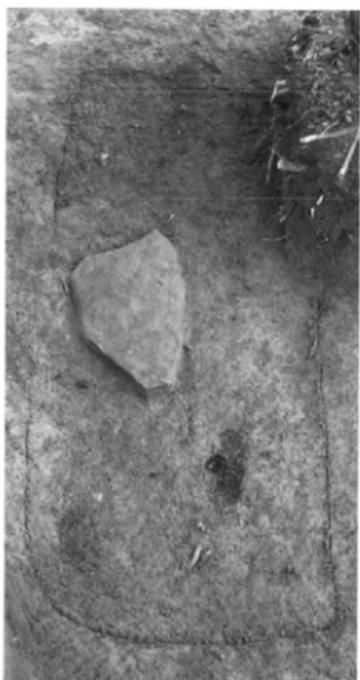
1 SK02土壤検出状況全景（東から）



2 SK02土壤副葬鏡
出土状態（北から）



3 SK02土壤掘方断面検出状況（東から）



1 SK04土壤検出状況（掘下げ前、東から）



2 SK04土壤検出状況（掘下げ後、西から）



3 SK05土壤検出状況（東から）



1 SK11土壤検出状況（西から）



2 第Ⅰ区全景（南から）



1 第Ⅲ区調査前全景（北から）



2 第Ⅲ区南半部調査風景（南から）



第Ⅲ区全景（北から）



1 SK10土壤検出状況（北から）



2 SK03住居跡検出状況（南から）



3 SK16土壤検出状況（西から）



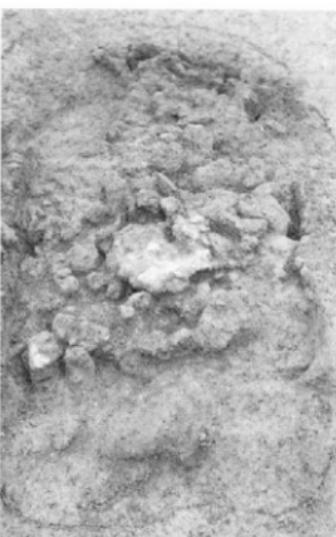
1 SK17・18土壤検出状況（西から）



2 SK17土壤副葬土器出土状況（北から）



1 SG01製鉄炉検出状況（東から）



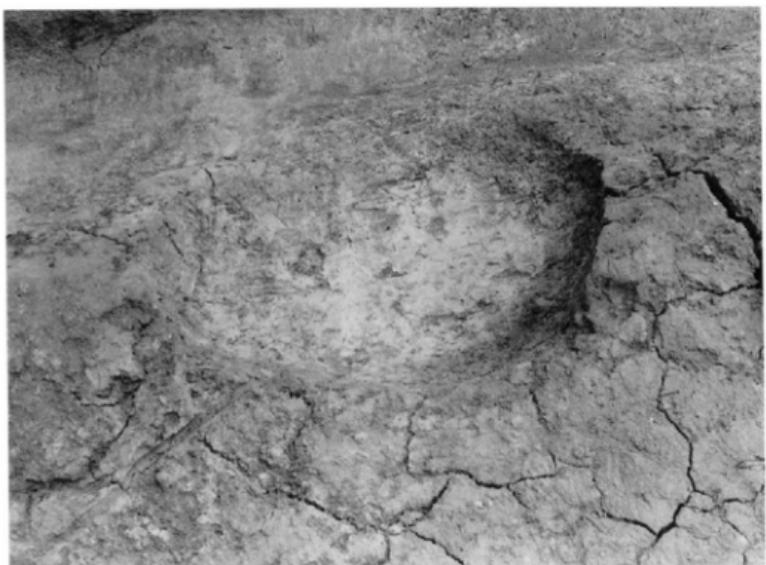
2 SG01製鉄炉検出状況（西から）



3 SG01製鉄炉内鉄滓除去状態（西から）



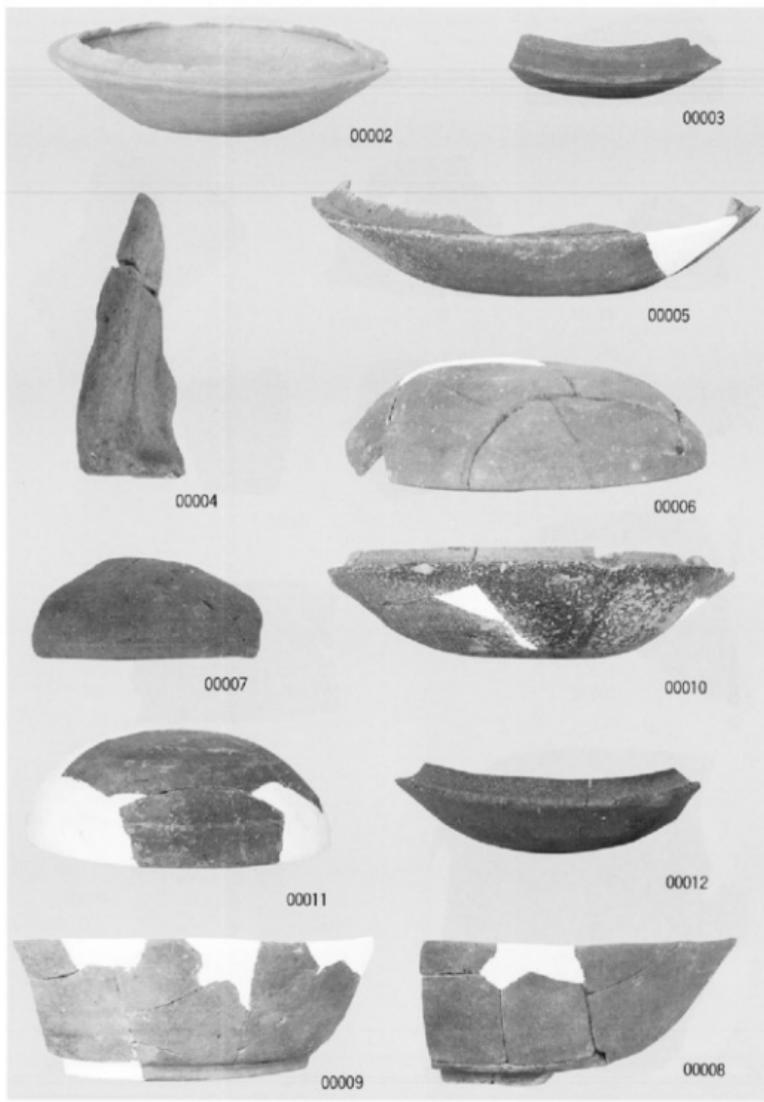
4 SG01製鉄炉完掘状況（西から）



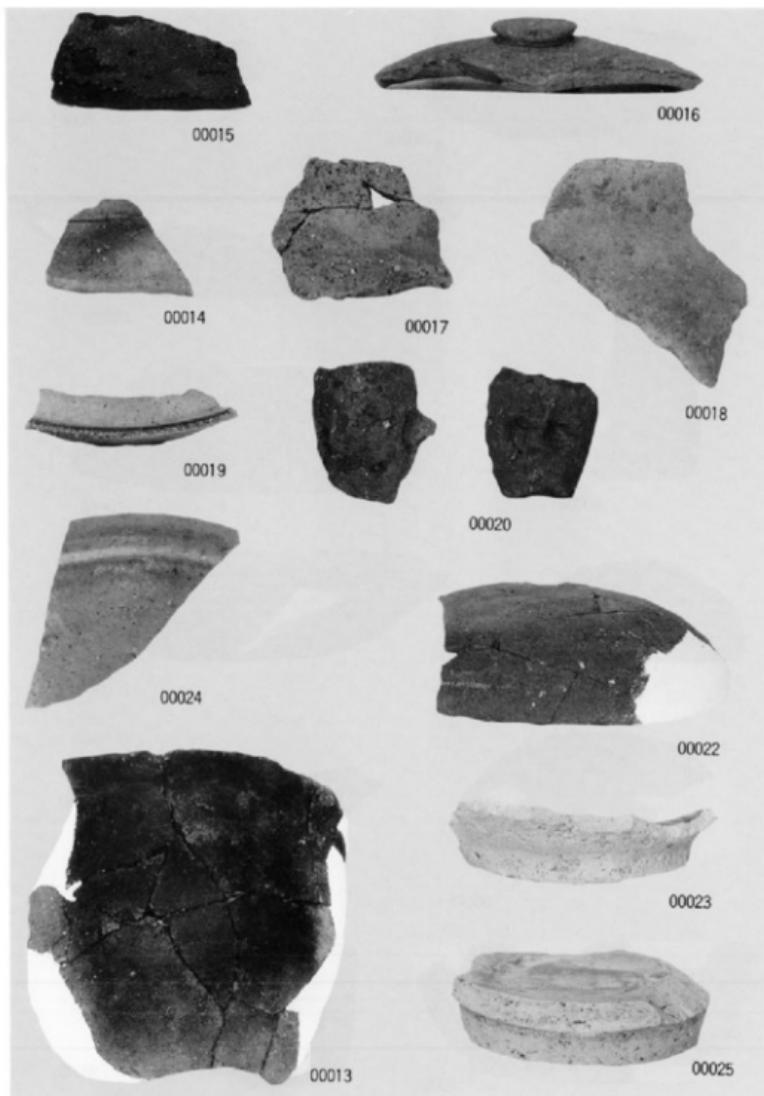
1 SK15土壤検出状況（西から）



2 第Ⅲ区調査遠景（熊添池東南から）

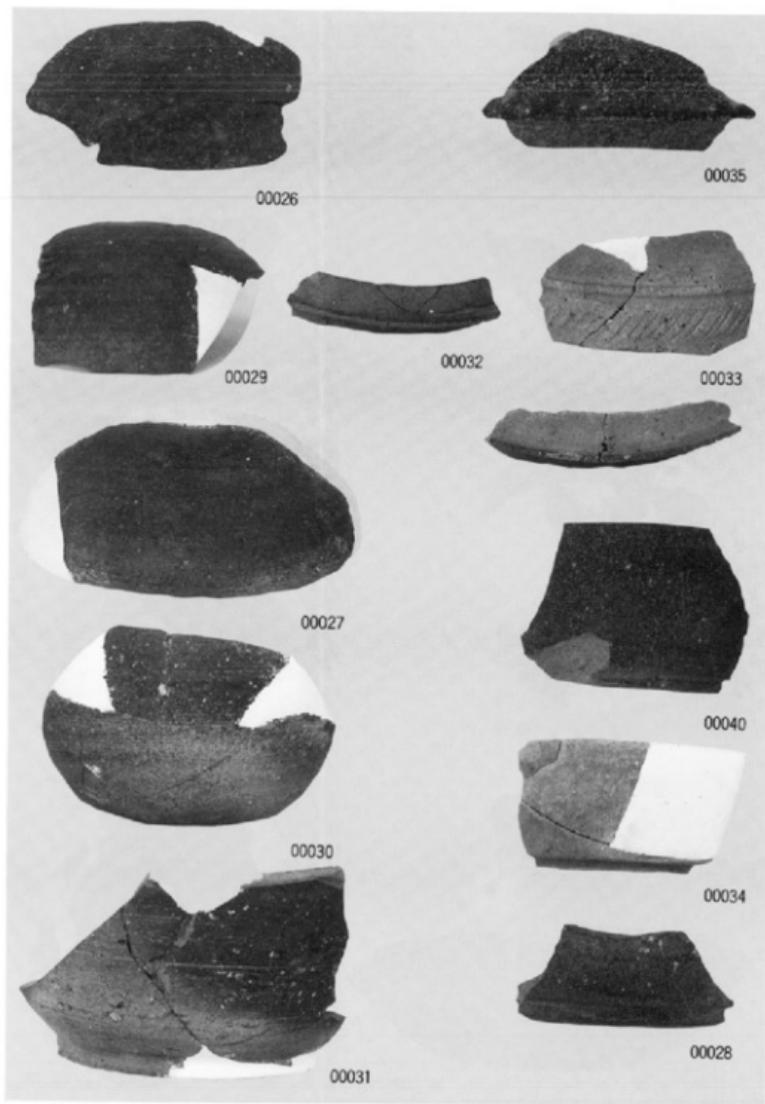


SC01住居跡出土遺物



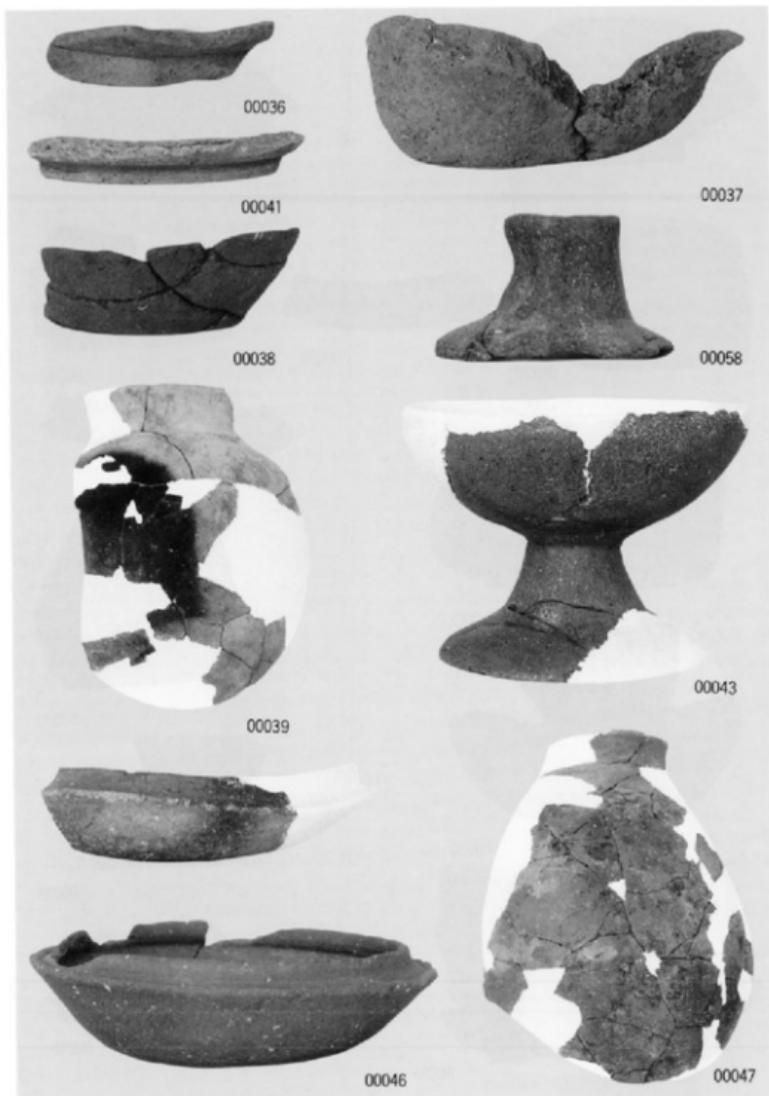
SC01住居跡・SK06土壤・SD01・02溝・SP36・37・39柱穴出土遺物

13・14・15→SC01	19・20	→SD01
16	→SD36	
17	→SD37	22・23・25→SD02
18	→SD39	



SD04溝および第II区遺構検出面出土遺物

26→SD-04溝
他は全て遺構検出面出土



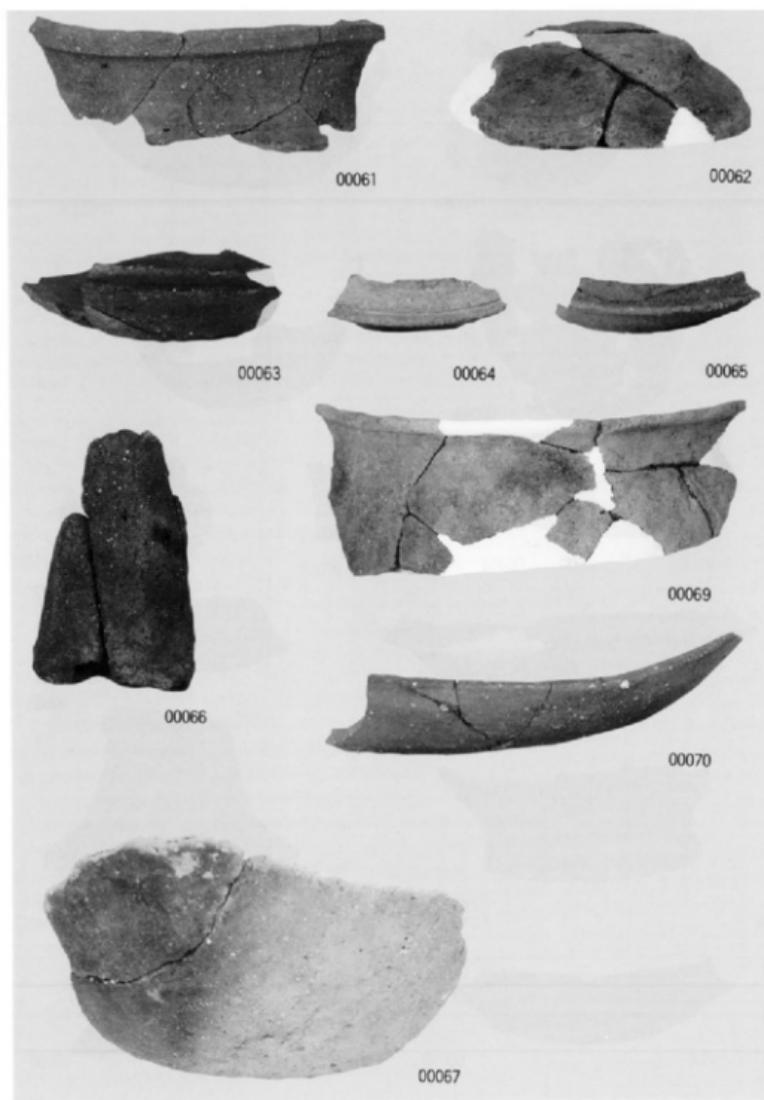
第II区遺構検出面・第III区柱穴および遺構検出面、SC03住居跡出土遺物

36~41・43→第II区遺構検出面
45 → 第III区SD119柱穴
46 → 同遺構検出面
47 → SC03住居跡



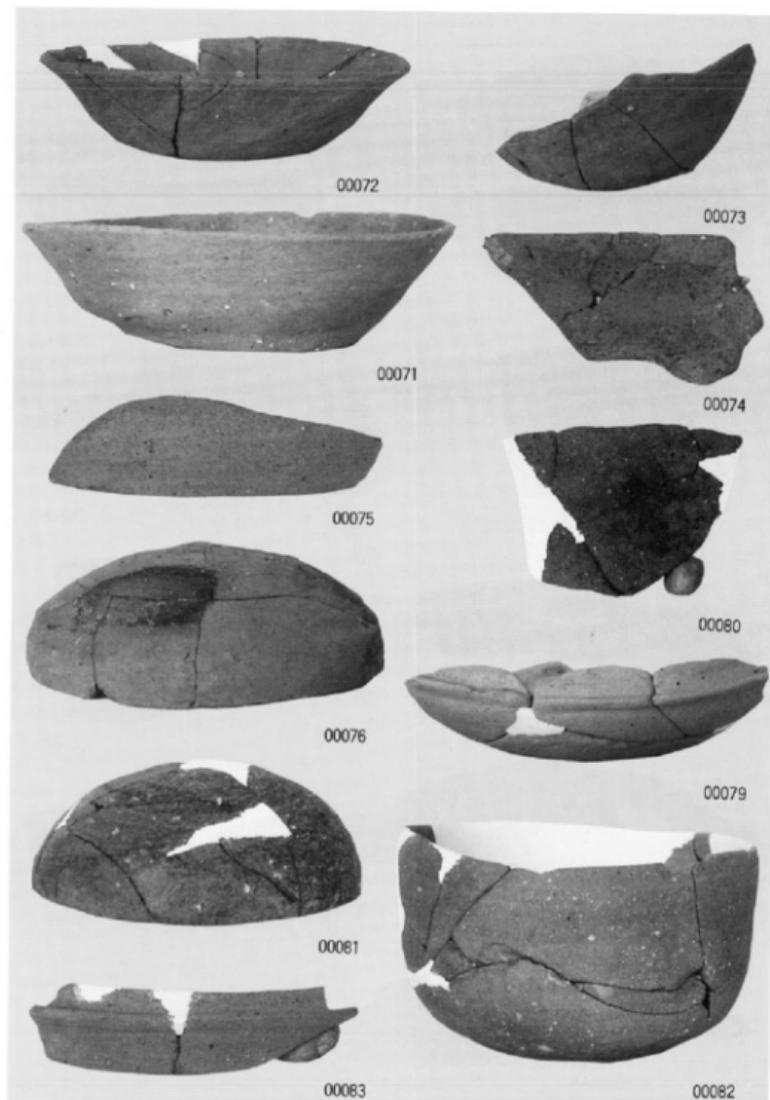
SC03住居跡・SK03・12・13土壤出土遺物

48~53→SC03住居跡
54 →SK03土壤
55~58→SK12土壤
59~60→SK13土壤



SK03・04土壤出土遺物

61～67・69→第Ⅲ区SK13土壤
70 →SK14土壤



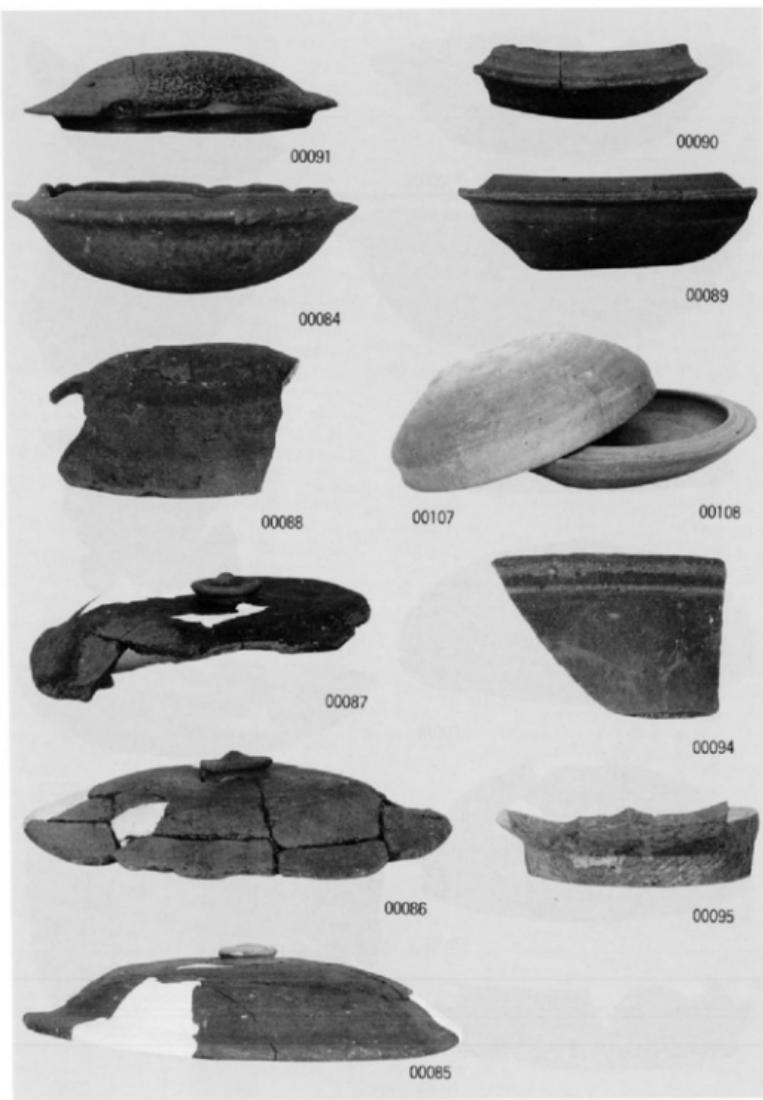
SK17土壤・SG01製鉄炉・SF01道路状遺構出土遺物

71・72

73・74

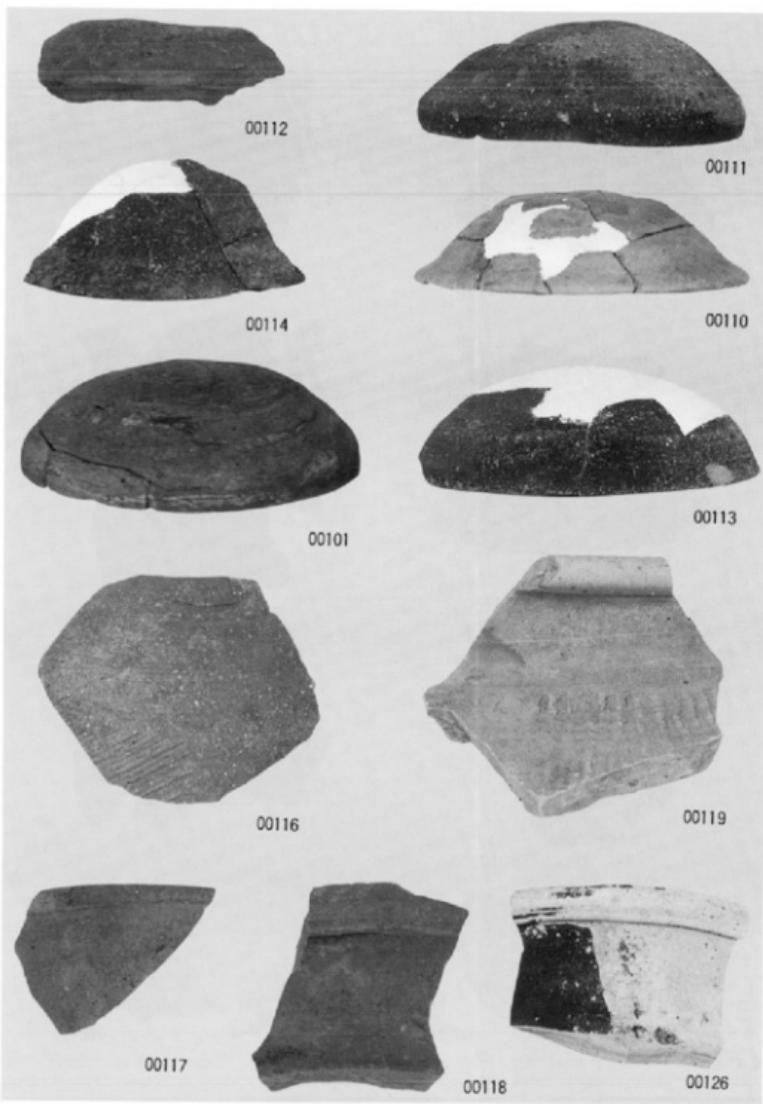
→SK17土壤
→SG01製鉄炉

75・76・79・80・82・83→SF01道路状遺構

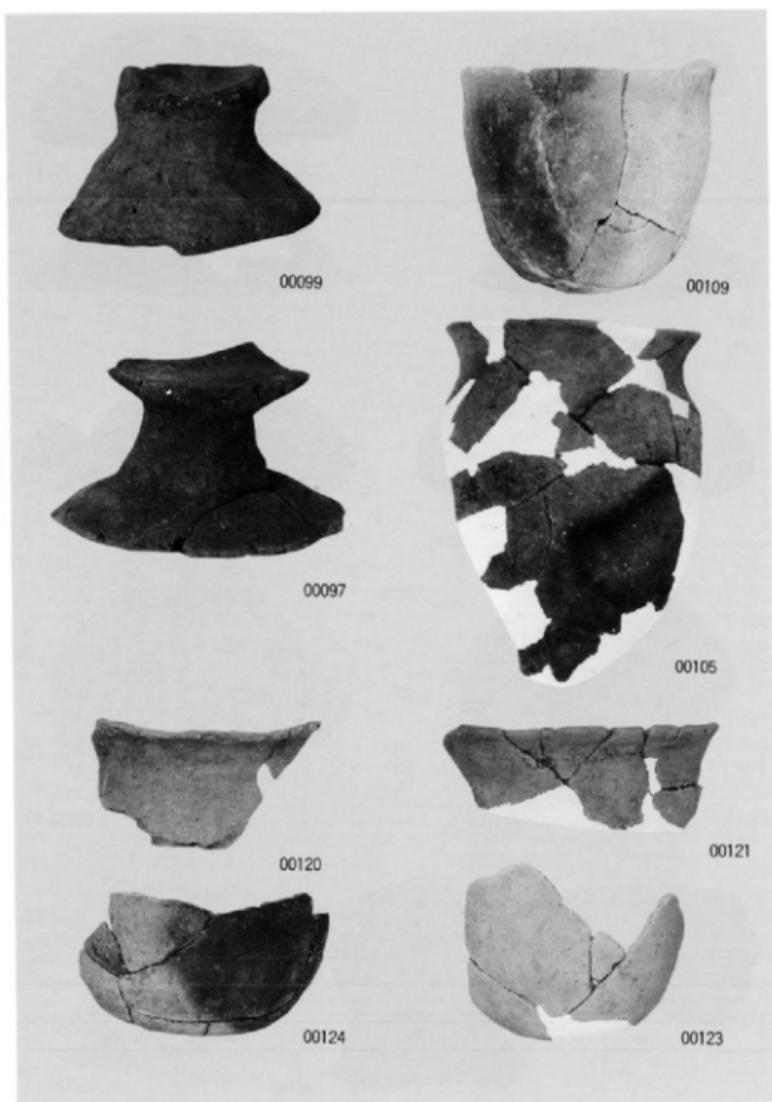


第三区遗构棱外面·遗物包含层出土遗物

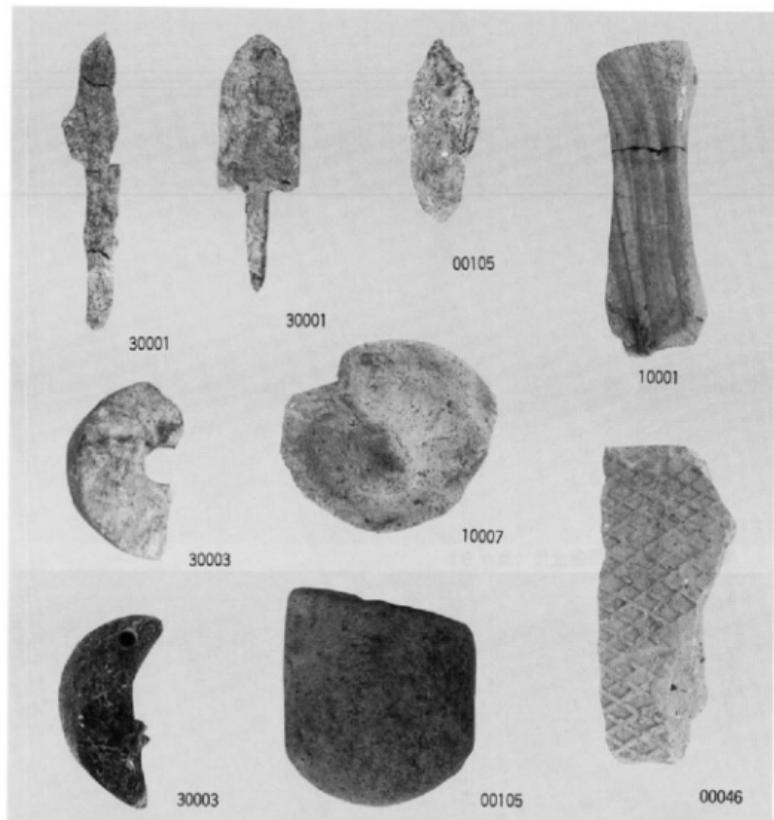
84 → 第三区遗构棱外面
85~91
94·95 → 遗物包含层
107·108



第Ⅲ区遗物包含层出土遗物(1)



第三区遗物包含层出土遗物(2)



SC01住居跡・SK02・03土壤・SD01溝及び第II・III区遺構検出面出土遺物

- 30001 → 第II区遺構検出面
- 00105・10015・30003 → 第III区遺構検出面
- 10001 → SC01住居跡
- 30002 → SK02土壤
- 30003 → SK03土壤
- 10007 → SD01溝



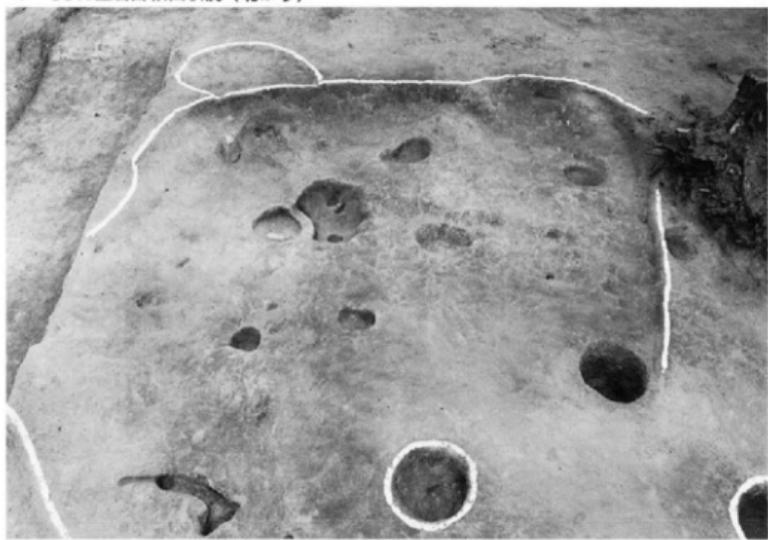
1 第2次調査Ⅰ区西側全景（東から）



2 第2次調査Ⅱ区北側全景（北から）



1 SC03住居跡検出状況（北から）



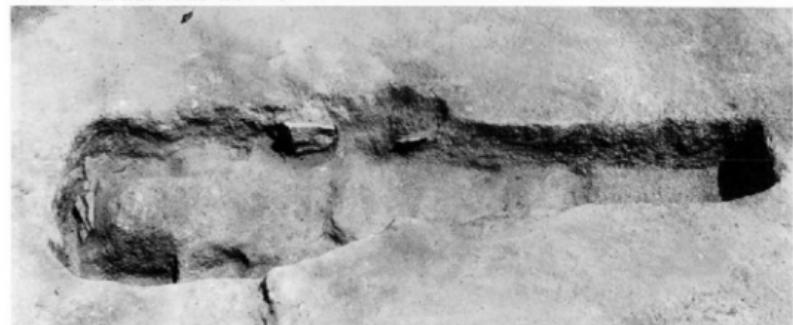
2 SC14住居跡検出状況（西から）



1 SK12土壤検出状況（南から）



2 SK22土壤検出状況（南から）



3 SK23土壤検出状況（南から）



1 SK24土壤検出状況（南から）



2 SK25土壤検出状況（東から）



3 SK26土壤検出状況（北から）



1 3次調査地点遠景（東から）



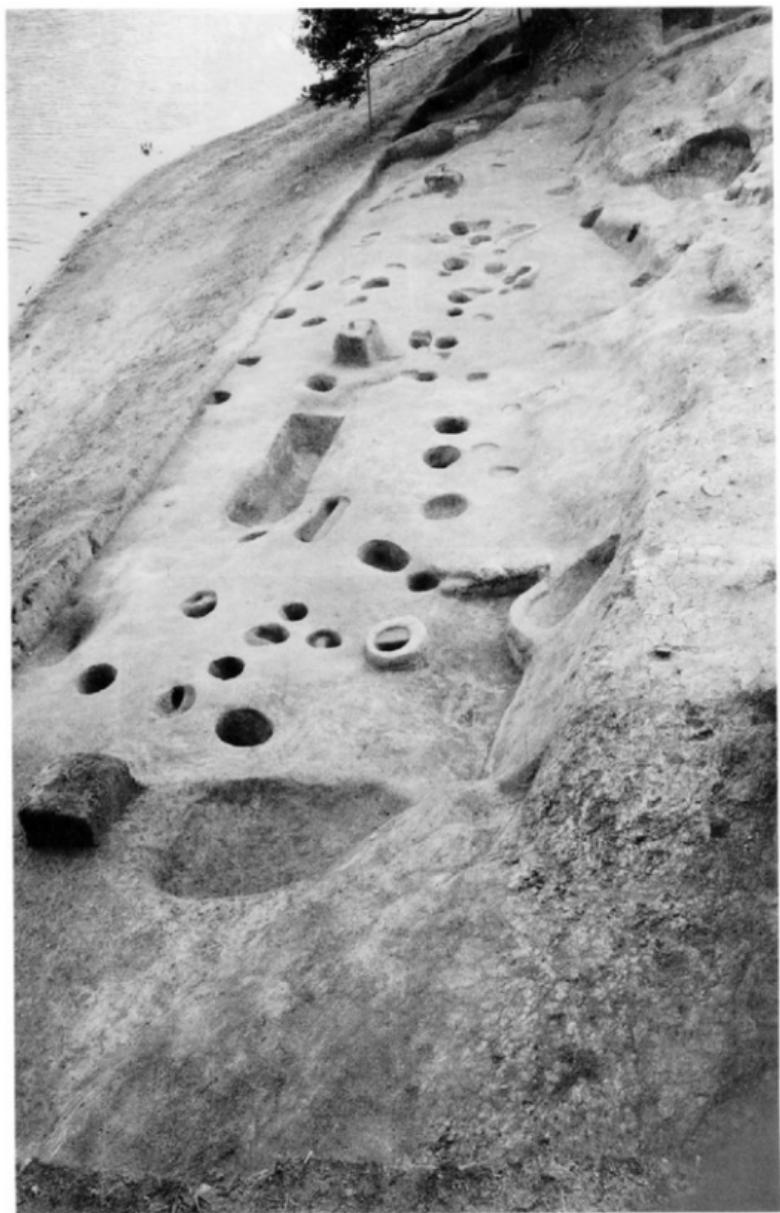
2 3次調査地点近景（南から）



1 3次調査地点近景（北から）



2 完掘状況（北から）



テラスⅠ遺構検出状況（北から）



1 B～D区完掘状況（北から）



2 B区完掘状況（西から）



1 E 区完掘状況（南から）



2 藏骨器出土状況（北から）



3 SK04土壤検出状況（南から）



1 SK02土壤墓検出状況（東から）



2 SK02土壤墓副葬遺物出土状況（北から）



3 SK01土壤墓検出状況（北から）



4 SK01土壤検出状況（西から）

干隈遺跡

—飯倉G遺跡1～3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第334集

1993年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 祥文社印刷株式会社